



# WebSAM WinShare Ver7.0

## セットアップカード

# ごあいさつ

この度は WebSAM WinShare Ver7.0(以降、WinShare V7.0 と表記)をお買い上げいただき、誠にありがとうございます。本書には WinShare V7.0 のセットアップ手順や注意・制限事項などを記載しております。WinShare V7.0 をお使いになる前に必ずお読みください。

Microsoft、Windows、Windows Server、および Windows Vista は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Windows の正式名称は、Microsoft Windows Operating System です。

インテル、Intel、vPro はアメリカ合衆国およびその他の国におけるインテルコーポレーションまたはその子会社の商標または登録商標です。

WebSAM、WinShare は日本電気株式会社の日本における商標または登録商標です。

# 目次

ごあいさつ .....	1
目次 .....	2
1. パッケージ内容の確認 .....	3
2. 動作環境 .....	4
2.1. WinShare オペレーション .....	4
2.2. WinShare リモート .....	5
2.3. WinShare 中継サーバ .....	6
3. セットアップ手順 .....	7
3.1. インストール .....	7
3.1.1. WinShare オペレーション .....	7
3.1.2. WinShare リモート .....	14
3.1.3. WinShare 中継サーバ .....	21
3.2. 電源制御の準備 .....	25
3.3. コンソール接続の準備 .....	27
3.4. アンインストール .....	32
3.4.1. WinShare オペレーション、WinShare リモート .....	32
3.4.2. WinShare 中継サーバ .....	35
3.5. サイレントインストール/アンインストール .....	36
3.6. WinShare セットアップ エラーコード表 .....	43
4. 注意・制限事項 .....	44
4.1. 注意事項 .....	44
4.2. 制限事項 .....	46
5. 障害発生時の情報採取について .....	48
6. 参考 .....	49
6.1. 通信経路上にファイアウォールが存在する場合に必要な設定 .....	49
6.2. Windows ファイアウォール利用時に必要な設定 .....	51
6.3. Ctrl+Alt+Del 送信を利用する際に必要な設定 .....	54
6.4. Intel Active Management Technology(Intel AMT)のプロジェクティング設定例 .....	56
7. ライセンス .....	68

## **1. パッケージ内容の確認**

構成品表に記載されている添付品が全て揃っているか確認してください。

## 2. 動作環境

WinShare V7.0 が動作するために必要なハードウェアおよびソフトウェアの要件は以下の通りです。



対応 OS などの最新情報につきましては弊社製品ページをご参照ください。

<http://jpn.nec.com/websam/winshare/dousa.html>

### 2.1. WinShare オペレーション

対応機種	Mate シリーズ VersaPro シリーズ Express5800 シリーズ(MIPS 機種は除く) PC/AT 互換機
対応 OS	<b>・Windows Server</b> Windows Server 2016 Standard / Datacenter ※1 Windows Server 2012 R2 Standard / Datacenter ※1 Windows Server 2012 Standard / Datacenter ※1 Windows Server 2008 R2 Standard / Enterprise ※1 Windows Server 2008 Standard(x86, x64) / Enterprise(x86, x64) ※1 Windows Server 2003 R2 Standard Edition(x86, x64) / Enterprise Edition(x86, x64) ※2 Windows Server 2003 Standard Edition(x86, x64) / Enterprise Edition(x86, x64) ※2  <b>・Windows</b> Windows 10 Pro(x86, x64) ※3 Windows 8.1 Pro(x86, x64) Windows 8 Pro(x86, x64) Windows 7 Professional(x86, x64) Windows Vista Business(x86) Windows XP Professional(x86) ※4
メモリ	256MB 以上
ディスク	100MB 以上の空き容量
ディスプレイ解像度	VGA(640×480) ~ 4K(3840×2160)
ディスプレイ色数	256 色、High Color(65,536 色)、True Color(約 1,677 万色)
コンソール接続 (Windows)	Windows PowerShell 2.0 以降 Windows リモート管理(WinRM) 2.0 以降
コンソール接続 (Linux)	Tera Term 4.92 以降

※1 Server Core インストール環境はサポート対象外です。

※2 Windows Server 2003 R2 SP2 以降、および Windows Server 2003 SP2 以降がサポート対象です。

※3 Windows 10 バージョン 1709(Fall Creators Update)までがサポート対象です。

※4 Windows XP SP3 以降がサポート対象です。

## 2.2. WinShare リモート

対応機種	Mate シリーズ VersaPro シリーズ Express5800 シリーズ(MIPS 機種は除く) PC/AT 互換機
対応 OS	<p><b>・Windows Server</b></p> <p>Windows Server 2016 Standard / Datacenter ※1 Windows Server 2012 R2 Standard / Datacenter ※1 Windows Server 2012 Standard / Datacenter ※1 Windows Server 2008 R2 Standard / Enterprise ※1 Windows Server 2008 Standard(x86, x64) / Enterprise(x86, x64) ※1 Windows Server 2003 R2 Standard Edition(x86, x64) / Enterprise Edition(x86, x64) ※2 Windows Server 2003 Standard Edition(x86, x64) / Enterprise Edition(x86, x64) ※2</p> <p><b>・Windows</b></p> <p>Windows 10 Pro(x86, x64) ※3 Windows 8.1 Pro(x86, x64) Windows 8 Pro(x86, x64) Windows 7 Professional(x86, x64) Windows Vista Business(x86) Windows XP Professional(x86) ※4</p> <p><b>・Windows Embedded Server</b></p> <p>Windows Server 2016 for Embedded Systems Standard / Datacenter ※1 Windows Server 2012 R2 for Embedded Systems Standard / Datacenter ※1 Windows Server 2012 for Embedded Systems Standard / Datacenter ※1 Windows Server 2008 R2 for Embedded Systems Standard / Enterprise ※1 Windows Server 2008 for Embedded Systems Standard(x86, x64) / Enterprise(x86, x64) ※1 Windows Server 2003 R2 for Embedded Systems Standard Edition(x86, x64) / Enterprise Edition(x86, x64) ※2 Windows Server 2003 for Embedded Systems Standard Edition(x86, x64) / Enterprise Edition(x86, x64) ※2</p> <p><b>・Windows Embedded Enterprise</b></p> <p>Windows 10 IoT Enterprise(x86, x64) ※3 Windows Embedded 8.1 Pro(x86,x64) Windows Embedded 8 Pro(x86,x64) Windows 7 Professional for Embedded Systems(x86, x64) Windows Vista Business for Embedded Systems(x86) Windows XP Professional for Embedded Systems(x86) ※4</p>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>Windows Embedded Industry / Windows Embedded POSReady(WEPOS)</b></li> </ul> <p>Windows Embedded 8.1 Industry Pro(x86)      Windows Embedded POSReady 2009      Windows Embedded for Point of Service 1.1</p>
メモリ	256MB 以上
ディスク	100MB 以上の空き容量
ディスプレイ解像度	VGA(640×480) ~ 4K(3840×2160)
ディスプレイ色数	256 色、High Color(65,536 色)、True Color(約 1,677 万色)
電源制御	Wake on LAN Intel AMT 6.0 以降

※1 Server Core インストール環境はサポート対象外です。

※2 Windows Server 2003 R2 SP2 以降、および Windows Server 2003 SP2 以降がサポート対象です。

※3 Windows 10 バージョン 1709(Fall Creators Update)までがサポート対象です。

※4 Windows XP SP3 以降がサポート対象です。

## 2.3. WinShare 中継サーバ

対応機種	Express5800 シリーズ(MIPS 機種は除く) PC/AT 互換機
対応 OS	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>Windows Server</b></li> </ul> <p>Windows Server 2016 Standard / Datacenter ※1      Windows Server 2012 R2 Standard / Datacenter ※1      Windows Server 2012 Standard / Datacenter ※1</p>
メモリ	256MB 以上
ディスク	100MB 以上の空き容量

※1 Server Core インストール環境はサポート対象外です。



1 台の中継サーバに同時に接続できるリモート PC は 10 台までとなります。また、中継サーバを経由してリモート PC に接続できるオペレーション PC は同時に 2 台までとなります。

### 3. セットアップ手順

WinShare V7.0 のインストールおよびアンインストール手順について説明します。

#### 3.1. インストール

##### 3.1.1. WinShare オペレーション

WinShare オペレーションは、操作する側のマシン(以降、オペレーション PC)にインストールします。



インストール作業は、必ず Administrators グループに所属している(管理者権限を持っている)ユーザで行ってください。

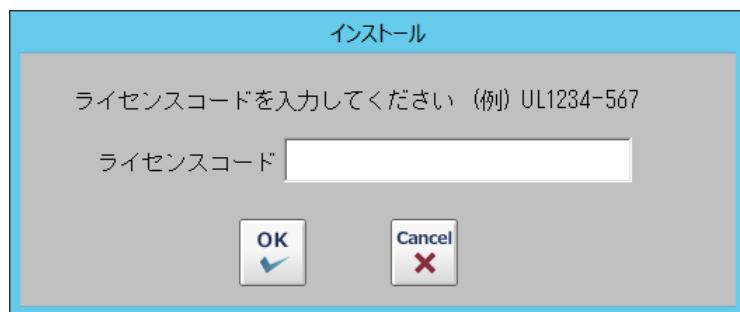
① WinShare のセットアップを起動します。

- 1) WinShare のインストール媒体を CD ドライブに挿入してください。
- 2) インストール媒体のルートフォルダにある“SETUP32I.EXE”を起動してください。
- 3) 『WinShare Setup メインメニュー』ダイアログが表示されますので、「インストール」ボタンをクリックしてください。

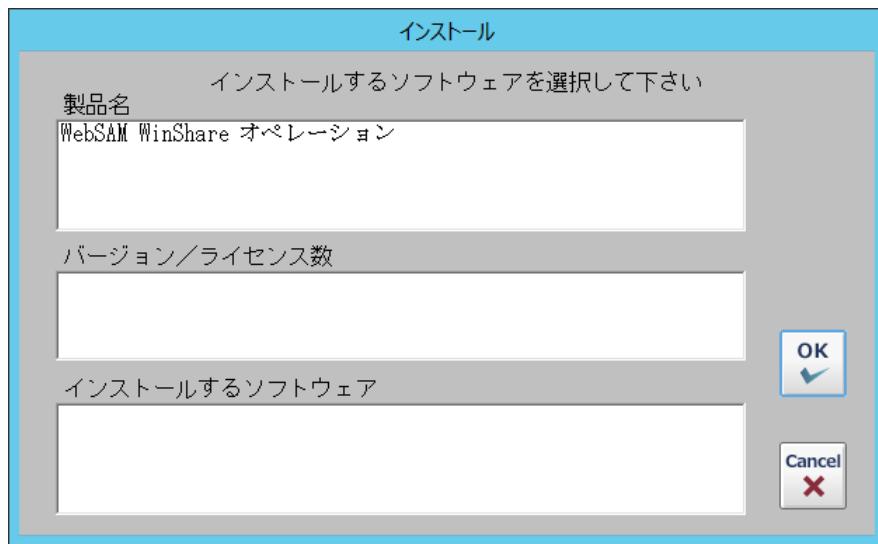


4) 『インストール』ダイアログが表示されます。

「ライセンスコード」に購入した製品の型番を入力し、「OK」ボタンをクリックしてください。



5) 「製品名」に購入した製品名が表示されますので、インストールする製品名をダブルクリックしてください。



6) 「バージョン／ライセンス数」に本セットアップでインストール可能なバージョンとライセンス数が表示されます。

内容が正しいことを確認し、表示されたバージョン／ライセンス数をダブルクリックしてください。

7) 「インストールするソフトウェア」にインストールされるソフトウェアが表示されます。

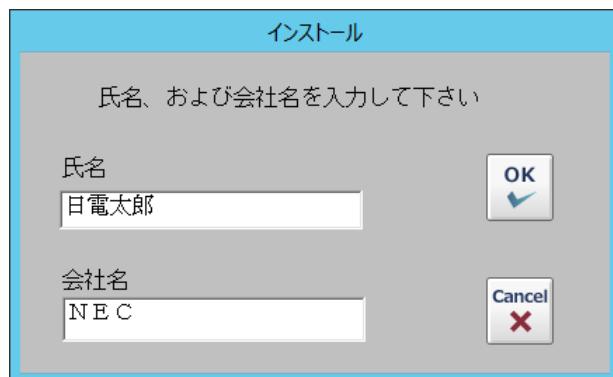
“WebSAM WinShare オペレーション バージョン 7.0”と表示されていることを確認し、「OK」ボタンをクリックしてください。



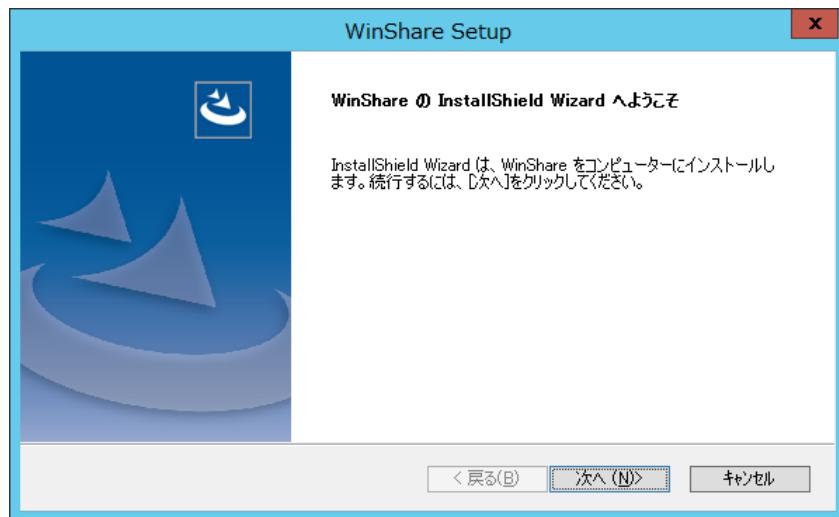
「WinShare 基本ライセンス」を購入された場合、WinShare オペレーションと WinShare リモートを一台のマシンに同時にインストールすることも可能です。その場合は、手順 5)～6) を繰り返し、「インストールするソフトウェア」に“WebSAM WinShare オペレーション バージョン 7.0”と、“WebSAM WinShare リモート バージョン 7.0”的両方を表示させた上で、「OK」ボタンをクリックしてください。

なお、WinShare リモートのインストール手順については、「3.1.2 3.1.2 WinShare リモート」を合わせてご参照ください。

8) 「氏名」と「会社名」を入力し、「OK」ボタンをクリックしてください。



②『WinShare Setup』ダイアログが表示されますので、「次へ」ボタンをクリックしてください。



③『インストール状況の確認』画面が表示されます。

WinShare のインストール状況に応じて、今回のセットアップで行うことができるインストールの種別が表示されます。内容を確認し、「次へ」ボタンをクリックしてください。



なお、インストール種別の説明は以下の通りです。

✓ **新規インストール**

このマシンには WinShare がインストールされていないため、新規にインストールを行います。

⇒ 次は手順 ④ にお進みください。

✓ **追加インストール**

このマシンには、インストールしようとしているバージョンと同じ WinShare リモートか WinShare 中継サーバ、もしくはその両方がインストールされているため、WinShare のインストールフォルダに追加でインストールを行います。

⇒ 次は手順 ⑤ にお進みください。

✓ **バージョンアップインストール**

このマシンには、インストールしようとしているバージョンよりも古い、もしくは同バージョンの WinShare オペレーションがインストールされているため、設定を引き継いだバージョンアップインストールを行います。

⇒ 次は手順 ⑤ にお進みください。

✓ **新バージョンがインストール済み**

このマシンには、インストールしようとしているバージョンよりも新しい WinShare オペレーションがインストールされているため、インストールを継続できません。

✓ **別コンポーネントの旧バージョンがインストール済み**

このマシンには、インストールしようとしているバージョンよりも古い WinShare リモートか WinShare 中継サーバ、もしくはその両方がインストールされているため、インストールを継続できません。

✓ **別コンポーネントの新バージョンがインストール済み**

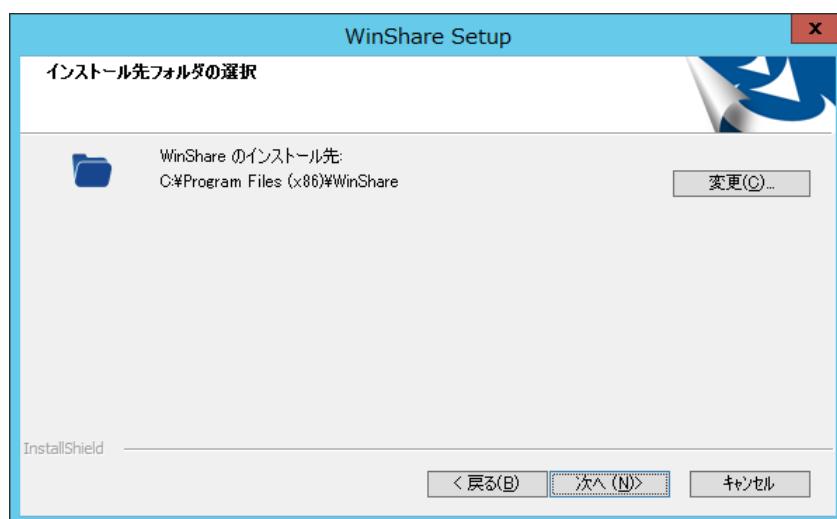
このマシンには、インストールしようとしているバージョンよりも新しい WinShare リモートか WinShare 中継サーバ、もしくはその両方がインストールされているため、インストールを継続できません。



WinShare オペレーションと WinShare リモート、および WinShare 中継サーバを同一マシンにインストールする場合は、バージョンを揃える必要があります。

④『インストール先フォルダの選択』画面が表示されます。

WinShare のインストール先フォルダを変更する場合は、「変更」ボタンをクリックしてパスを指定してください。インストール先フォルダの選択が完了したら、「次へ」ボタンをクリックしてください。



WinShare のデフォルトのインストールフォルダは以下の通りです。

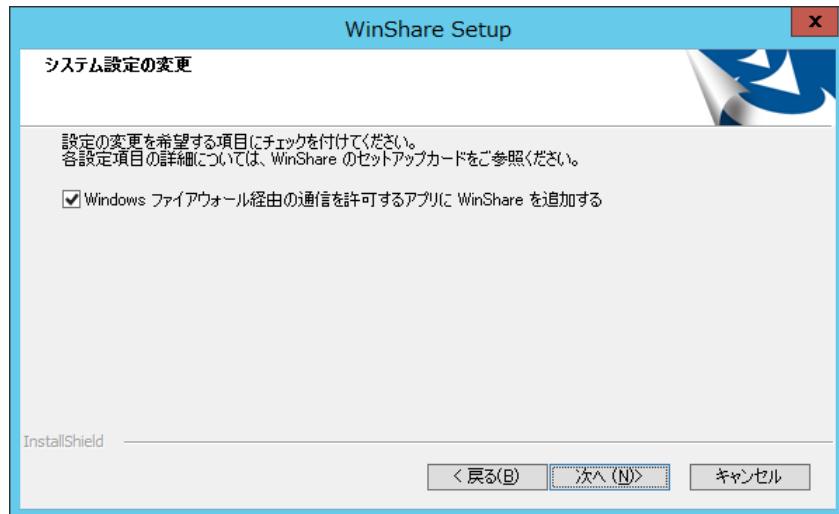
32bit システム : C:\Program Files\WinShare

64bit システム : C:\Program Files (x86)\WinShare

⑤『システム設定の変更』画面が表示されます。

WinShareをご利用になる際、オペレーション PC 側でシステム設定の変更が必要な場合があります。

セットアップ時にシステム設定の変更を行う場合は、設定項目にチェックを付けて「次へ」ボタンをクリックしてください。



設定項目の説明は以下の通りです。

✓ **Windows ファイアウォール経由の通信を許可するアプリに WinShare を追加する**

オペレーション PC にて Windows ファイアウォールを有効にしており、かつ V6.00 以前のリモート PC に接続する場合、WinShare の通信が遮断され、クリップボードテキスト受信を行うことができません。本設定項目にチェックを付けると、Windows ファイアウォールに通信を許可するアプリとして WinShare が追加されます。



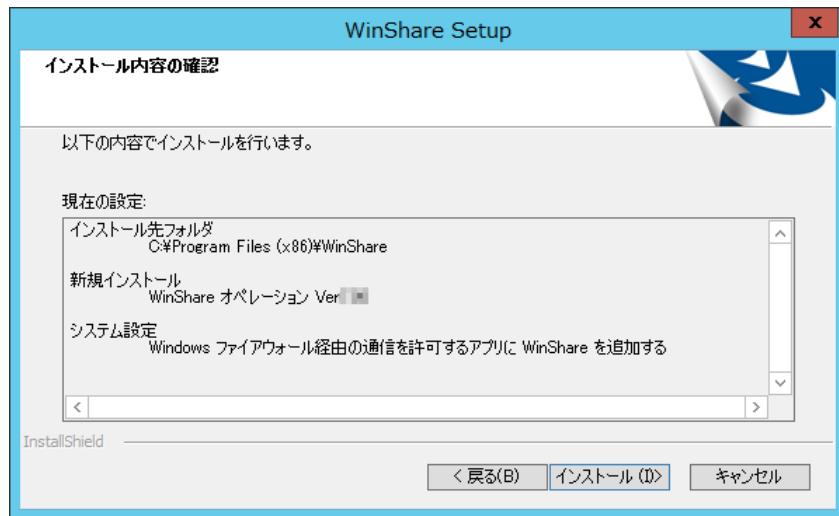
Windows ファイアウォールに「WinShare」という名前のアプリや機能が既に登録されている場合、「Windows ファイアウォール経由の通信を許可するアプリに WinShare を追加する」にチェックを付けても、Windows ファイアウォールに WinShare の情報は追加されません。

その際は、「6.2 Windows ファイアウォール利用時に必要な設定」を参照いただき、手動で Windows ファイアウォールに WinShare の情報を追加してください。

⑥『インストール内容の確認』画面が表示されます。

インストールの内容を確認し、表示された設定で問題ない場合は「インストール」ボタンをクリックしてください。

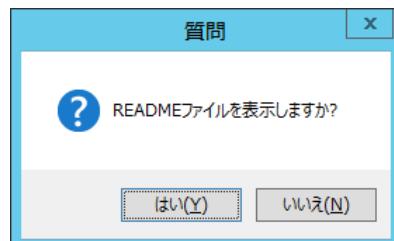
設定を変更する場合は「戻る」ボタンをクリックし、設定を変更する画面まで戻ってください。



⑦『質問』ダイアログが表示されます。

WinShare の README を読む場合は、「はい」ボタンをクリックしてください。

「はい」を選択した場合、表示された README を閉じるまでセットアップは処理を停止します。

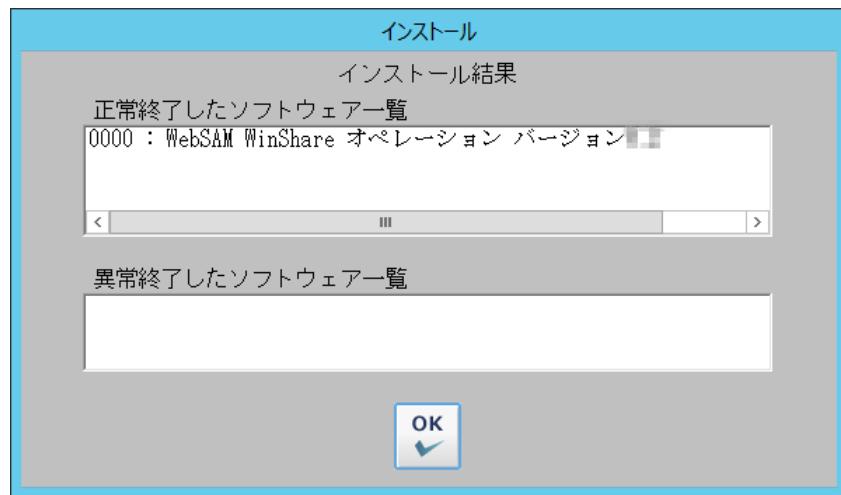


⑧ インストールが完了すると、以下のメッセージが表示されます。

「OK」ボタンをクリックしてください。



- ⑨『インストール』ダイアログの「正常終了したソフトウェア一覧」に、『WebSAM WinShare オペレーション バージョン 7.0』が表示されていることを確認して、「OK」ボタンをクリックしてください。



- ⑩『WinShare Setup メインメニュー』ダイアログの「終了」ボタンをクリックし、セットアップを終了してください。  
その後、システムの再起動を行ってください。



オペレーション PC とリモート PC の間の通信経路上にファイアウォールが設置されている環境でご利用いただく場合は WinShare で利用するポートの透過設定を行う必要があります。  
「6.1 通信経路上にファイアウォールが存在する場合に必要な設定」をご参照いただき、適切な設定を行ってください。

### 3.1.2. WinShare リモート

WinShare リモートは、操作される側のマシン(以降、リモート PC)にインストールします。



インストール作業は、必ず Administrators グループに所属している(管理者権限を持っている)ユーザで行ってください。

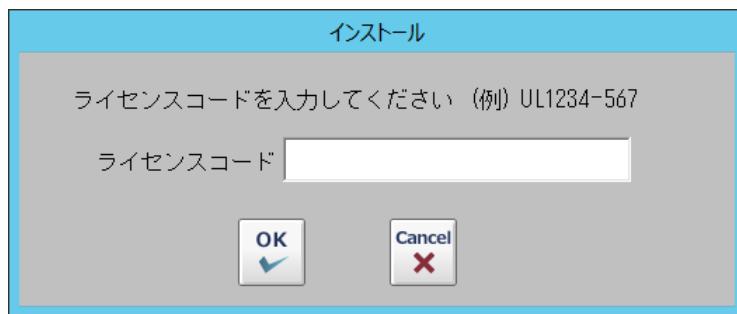
① WinShare のセットアップを起動します。

- 1) WinShare のインストール媒体を CD ドライブに挿入してください。
- 2) インストール媒体のルートフォルダにある“SETUP32I.EXE”を起動してください。
- 3) 『WinShare Setup メインメニュー』ダイアログが表示されますので、「インストール」ボタンをクリックしてください。

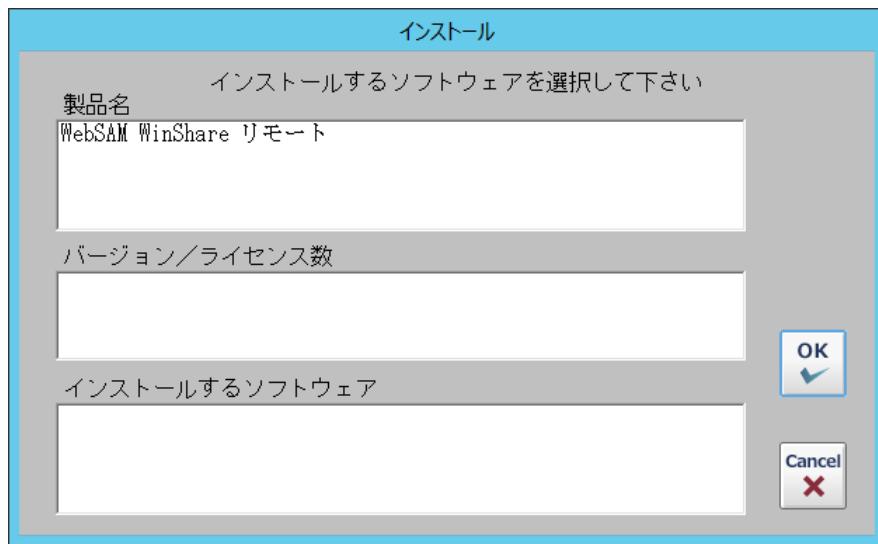


4) 『インストール』ダイアログが表示されます。

「ライセンスコード」に購入した製品の型番を入力し、「OK」ボタンをクリックしてください。



5) 「製品名」に購入した製品名が表示されますので、インストールする製品名をダブルクリックしてください。



6) 「バージョン／ライセンス数」に本セットアップでインストール可能なバージョンとライセンス数が表示されます。

内容が正しいことを確認し、表示されたバージョン／ライセンス数をダブルクリックしてください。

7) 「インストールするソフトウェア」にインストールするソフトウェアが表示されます。

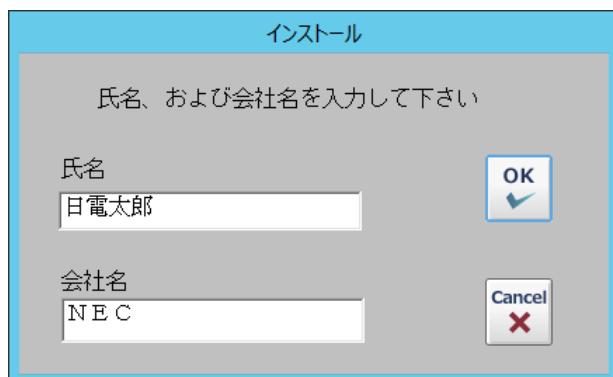
“WebSAM WinShare リモート バージョン 7.0”と表示されていることを確認し、「OK」ボタンをクリックしてください。



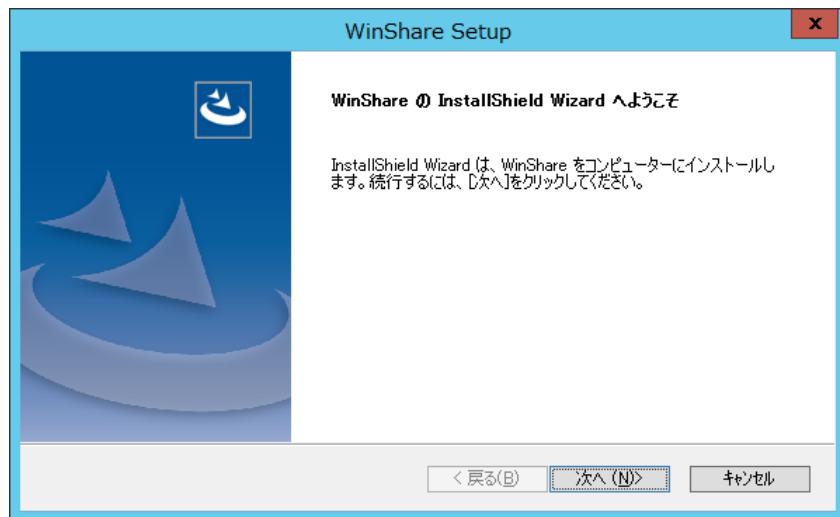
「WinShare 基本ライセンス」を購入された場合、WinShare オペレーションと WinShare リモートを一台のマシンに同時にインストールすることも可能です。その場合は、手順 5)～6) を繰り返し、「インストールするソフトウェア」に“WebSAM WinShare オペレーション バージョン 7.0”と、“WebSAM WinShare リモート バージョン 7.0”的両方を表示させた上で、「OK」ボタンをクリックしてください。

なお、WinShare オペレーションのインストール手順については、「3.1.1 WinShare オペレーション」を合わせてご参照ください。

8) 「氏名」と「会社名」を入力し、「OK」ボタンをクリックしてください。

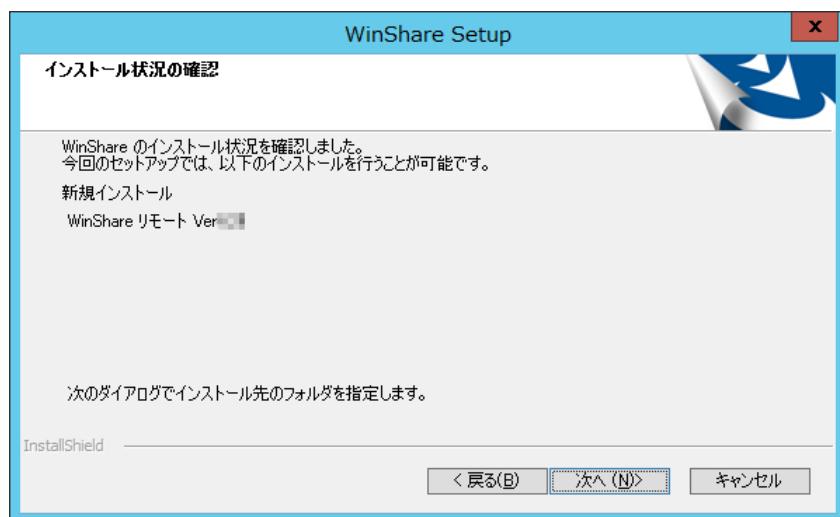


②『WinShare Setup』ダイアログが表示されますので、「次へ」ボタンをクリックしてください。



③『インストール状況の確認』画面が表示されます。

WinShare のインストール状況に応じて、今回のセットアップで行うことができるインストールの種別が表示されます。内容を確認し、「次へ」ボタンをクリックしてください。



なお、インストール種別の説明は以下の通りです。

✓ **新規インストール**

このマシンには WinShare がインストールされていないため、新規にインストールを行います。

⇒ 次は手順 ④ にお進みください。

✓ **追加インストール**

このマシンには、インストールしようとしているバージョンと同じ WinShare オペレーションか WinShare 中継サーバ、もしくはその両方がインストールされているため、WinShare のインストールフォルダに追加でインストールを行います。

⇒ 次は手順 ⑤ にお進みください。

#### ✓ バージョンアップインストール

このマシンには、インストールしようとしているバージョンよりも古い、もしくは同バージョンの WinShare リモートがインストールされているため、設定を引き継いだバージョンアップインストールを行います。

⇒ 次は手順 ⑤ にお進みください。

#### ✓ 新バージョンがインストール済み

このマシンには、インストールしようとしているバージョンよりも新しい WinShare リモートがインストールされているため、インストールを継続できません。

#### ✓ 別コンポーネントの旧バージョンがインストール済み

このマシンには、インストールしようとしているバージョンよりも古い WinShare オペレーションか WinShare 中継サーバ、もしくはその両方がインストールされているため、インストールを継続できません。

#### ✓ 別コンポーネントの新バージョンがインストール済み

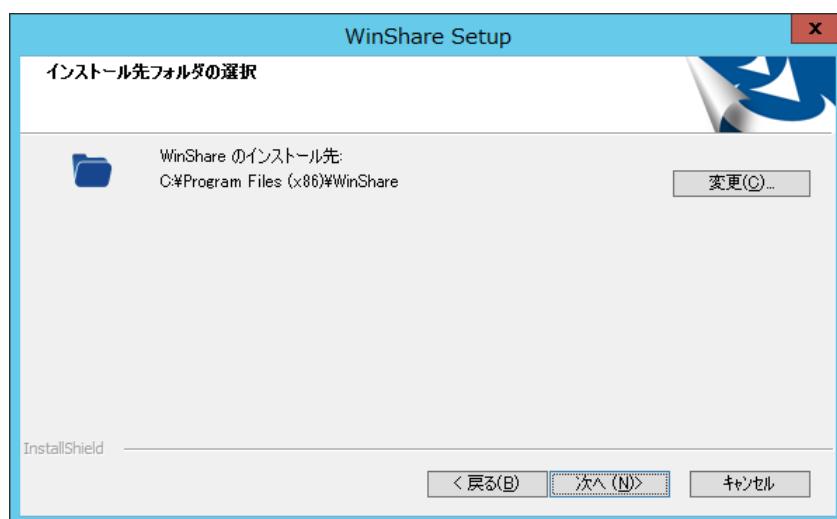
このマシンには、インストールしようとしているバージョンよりも新しい WinShare オペレーションか WinShare 中継サーバ、もしくはその両方がインストールされているため、インストールを継続できません。



WinShare オペレーションと WinShare リモート、および WinShare 中継サーバを同一マシンにインストールする場合は、バージョンを揃える必要があります。

#### ④『インストール先フォルダの選択』画面が表示されます。

WinShare のインストール先フォルダを変更する場合は、「変更」ボタンをクリックしてパスを指定してください。インストール先フォルダの選択が完了したら、「次へ」ボタンをクリックしてください。



WinShare のデフォルトのインストールフォルダは以下の通りです。

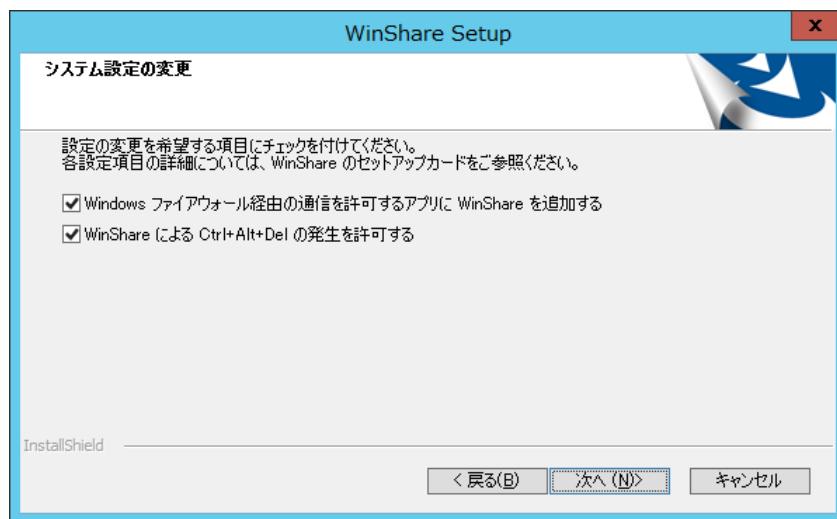
32bit システム : C:\Program Files\WinShare

64bit システム : C:\Program Files (x86)\WinShare

⑤『システム設定の変更』画面が表示されます。

WinShareをご利用になる際、リモートPC側でシステム設定の変更が必要な場合があります。

セットアップ時に自動でシステム設定の変更を行う場合は、各設定項目にチェックを付けて「次へ」ボタンをクリックしてください。



設定項目の説明は以下の通りです。

✓ **Windows ファイアウォール経由の通信を許可するアプリに WinShare を追加する**

リモートPCにてWindowsファイアウォールを有効にしている場合、WinShareの通信が遮断され、リモート操作やファイル転送を行うことができません。本設定項目にチェックを付けると、Windowsファイアウォールに通信を許可するアプリとしてWinShareが追加されます。

✓ **WinShare による Ctrl+Alt+Del の発生を許可する**

リモートPCがWindowsVista以降の場合、システム標準のポリシー設定では、オペレーションPCからCtrl+Alt+Del送信を行ってもリモートPCでCtrl+Alt+Delが再現されません。本設定項目にチェックを付けると、WinShareによるCtrl+Alt+Delの発生が許可されるようになります。



Windowsファイアウォールに「WinShare」という名前のアプリや機能が既に登録されている場合、「Windows ファイアウォール経由の通信を許可するアプリに WinShare を追加する」にチェックを付けても、WindowsファイアウォールにWinShareの情報は追加されません。

その際は、「6.2 Windows ファイアウォール利用時に必要な設定」を参照いただき、手動でWindowsファイアウォールにWinShareの情報を追加してください。



WinShareによるCtrl+Alt+Delの発生を許可するためのシステムのポリシー設定変更は手動でも行うことが可能です。

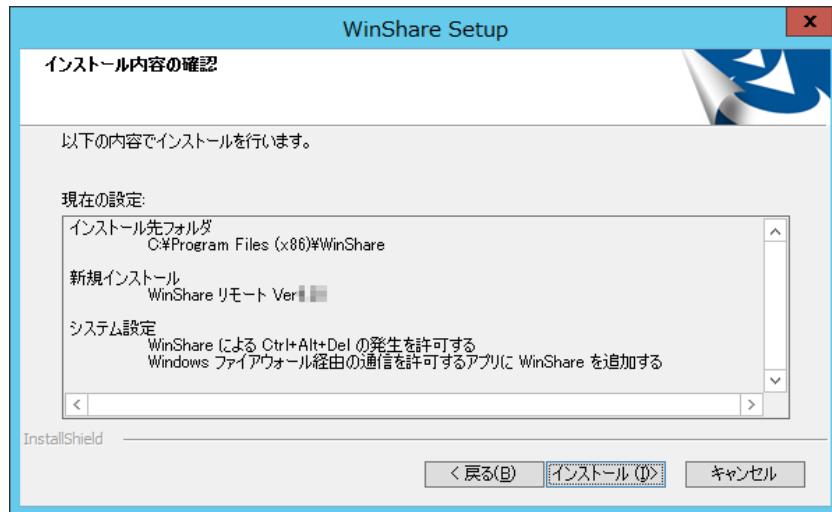
手動で行う場合は、「6.3 Ctrl+Alt+Del送信を利用する際に必要な設定」を参照し、システムのポリシー設定を変更してください。

⑥『インストール内容の確認』画面が表示されます。

インストールの内容を確認し、表示された設定で問題ない場合は「インストール」ボタンをクリックしてください。

設定を変更する場合は「戻る」ボタンをクリックし、設定を変更する画面まで戻ってください。

なお、“バージョンアップインストール”的場合は、手順 ⑧ にお進みください。



⑦『ユーザの追加』ダイアログが表示されます。

WinShare の管理者ユーザとして使用する「ユーザ名」と「パスワード」を入力し、「登録」ボタンをクリックしてください。

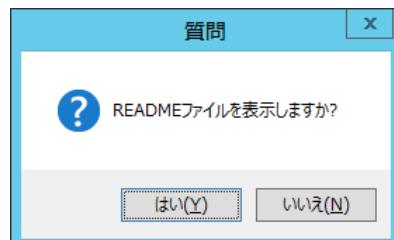


ここで登録する管理者ユーザは WinShare ユーティリティ(リモート PC 側の設定ツール)を利用する際に使用します。

⑧『質問』ダイアログが表示されます。

WinShare の README を読む場合は、「はい」ボタンをクリックしてください。

「はい」を選択した場合、表示された README を閉じるまでセットアップは処理を停止します。

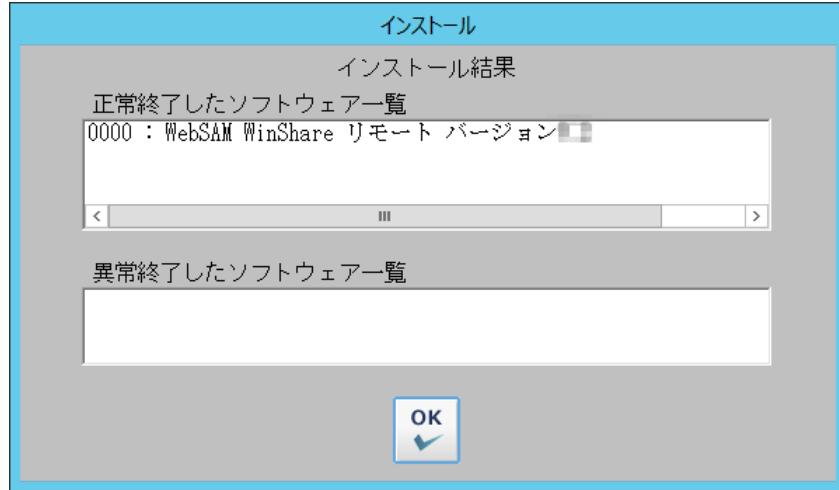


⑨ インストールが完了すると、以下のメッセージが表示されます。

「OK」ボタンをクリックしてください。



⑩ 『インストール』ダイアログの「正常終了したソフトウェア一覧」に、**“WebSAM WinShare リモート バージョン 7.0”** が表示されていることを確認して、「OK」ボタンをクリックしてください。



⑪ 『WinShare Setup メインメニュー』ダイアログの「終了」ボタンをクリックし、セットアップを終了してください。

その後、システムの再起動を行ってください。

⑫ システムの再起動後、WinShare ユーティリティ(リモート PC 側の設定ツール)を起動し、必要に応じてリモート PC 側の設定を変更してください。



オペレーション PC とリモート PC の間の通信経路上にファイアウォールが設置されている環境でご利用いただく場合は WinShare で利用するポートの透過設定を行う必要があります。  
「6.1 通信経路上にファイアウォールが存在する場合に必要な設定」をご参照いただき、適切な設定を行ってください。



WinShare リモートはサイレントインストール/アンインストールを行うことも可能です。  
詳細は、「3.5 サイレントインストール/アンインストール」をご参照ください。

### 3.1.3. WinShare 中継サーバ

WinShare 中継サーバは、オペレーション PC とリモート PC の接続を中継するマシン(以降、中継サーバ)にインストールします。



中継サーバは、お客様の内部業務処理目的でご利用される際は無償でお使いいただけます。  
サービス事業用途でご利用される場合は弊社まで別途お問い合わせください。



インストール作業は、必ず Administrators グループに所属している(管理者権限を持っている)ユーザで行ってください。

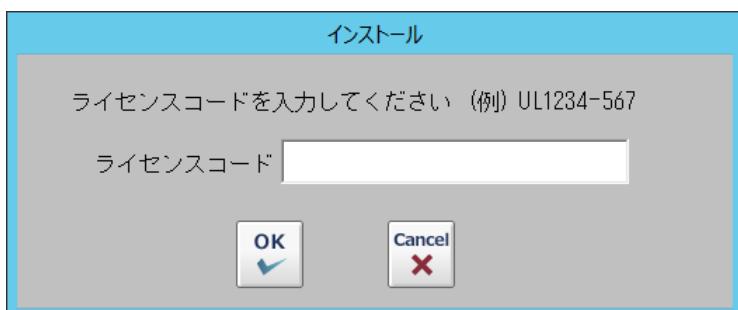
① WinShare のセットアップを起動します。

- 1) WinShare のインストール媒体を CD ドライブに挿入してください。
- 2) インストール媒体のルートフォルダにある“SETUP32I.EXE”を起動してください。
- 3) 『WinShare Setup メインメニュー』ダイアログが表示されますので、「インストール」ボタンをクリックしてください。

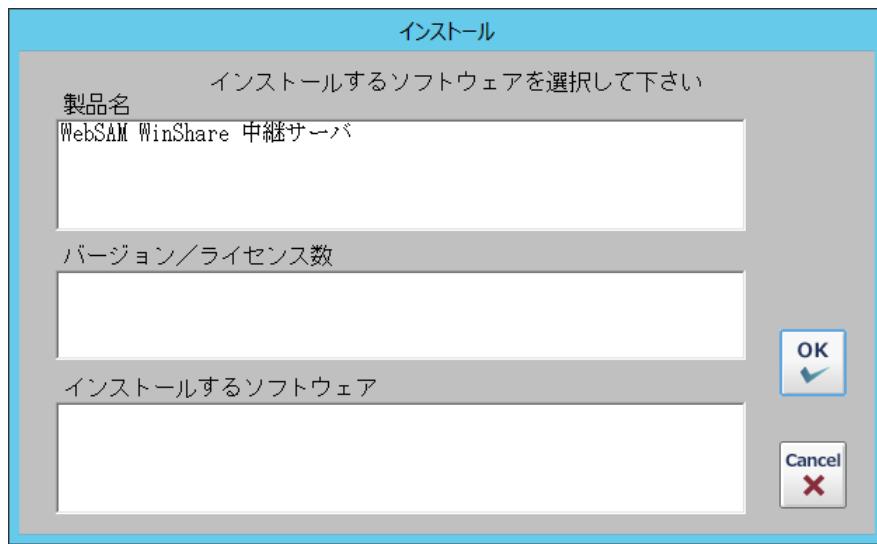


4) 『インストール』ダイアログが表示されます。

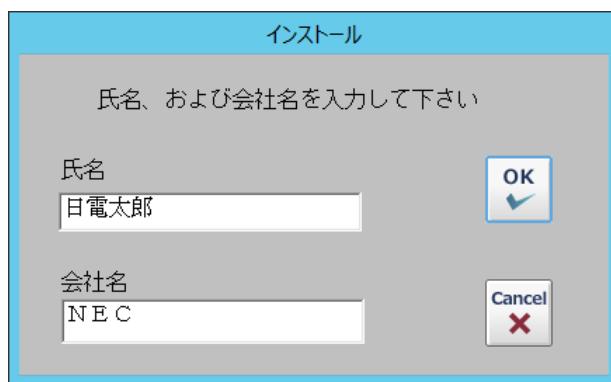
「ライセンスコード」に **UL1089-904** を入力し、「OK」ボタンをクリックしてください。



5) 「製品名」に表示される“WebSAM WinShare 中継サーバ”をダブルクリックしてください。



- 6) 「バージョン／ライセンス数」に本セットアップでインストール可能なバージョンとライセンス数が表示されます。内容が正しいことを確認し、表示されたバージョン／ライセンス数をダブルクリックしてください。
- 7) 「インストールするソフトウェア」にインストールするソフトウェアが表示されます。“WebSAM WinShare 中継サーバ バージョン 7.0”と表示されていることを確認し、「OK」ボタンをクリックしてください。
- 8) 「氏名」と「会社名」を入力し、「OK」ボタンをクリックしてください。



②『WinShare Setup』ダイアログが表示されます。WinShare オペレーション、もしくは WinShare リモートが既にインストールされている場合は手順 ④ にお進みください。

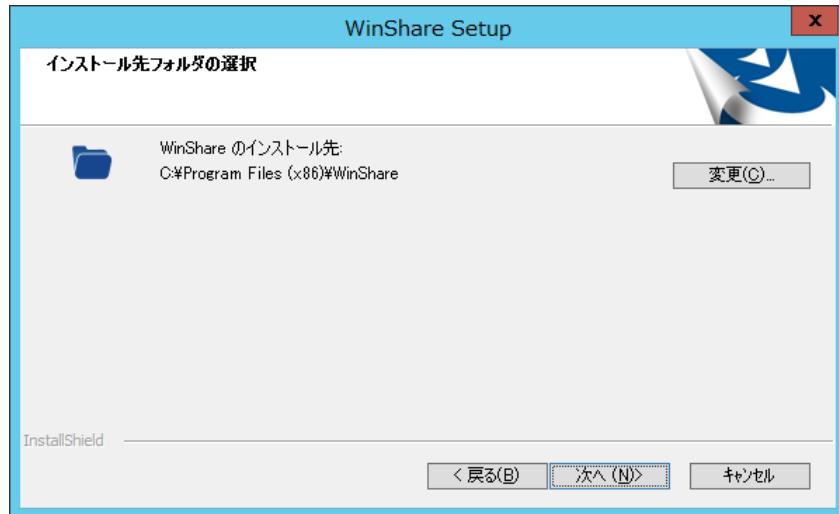


WinShare オペレーションと WinShare リモート、および WinShare 中継サーバを同一マシンにインストールする場合は、全てのバージョンを揃える必要がありますのでご注意ください。

③『インストール先フォルダの選択』画面が表示されます。

WinShare のインストール先フォルダを変更する場合は、「変更」ボタンをクリックしてパスを指定してください。

インストール先フォルダの選択が完了したら、「次へ」ボタンをクリックしてください。



WinShare のデフォルトのインストールフォルダは以下の通りです。

32bit システム : C:\Program Files\WinShare

64bit システム : C:\Program Files (x86)\WinShare

④『システム設定の変更』画面が表示されます。

WinShare をご利用になる際、中継サーバ側でシステム設定の変更が必要な場合があります。

セットアップ時に自動でシステム設定の変更を行う場合は、各設定項目にチェックを付けて「次へ」ボタンをクリックしてください。



設定項目の説明は以下の通りです。

✓ **Windows ファイアウォール経由の通信を許可するアプリに WinShare を追加する**

中継サーバにて Windows ファイアウォールを有効にしている場合、WinShare の通信が遮断され、リモート接続の中継を行うことができません。本設定項目にチェックを付けると、Windows ファイアウォールに通信を許可するアプリとして WinShare が追加されます。



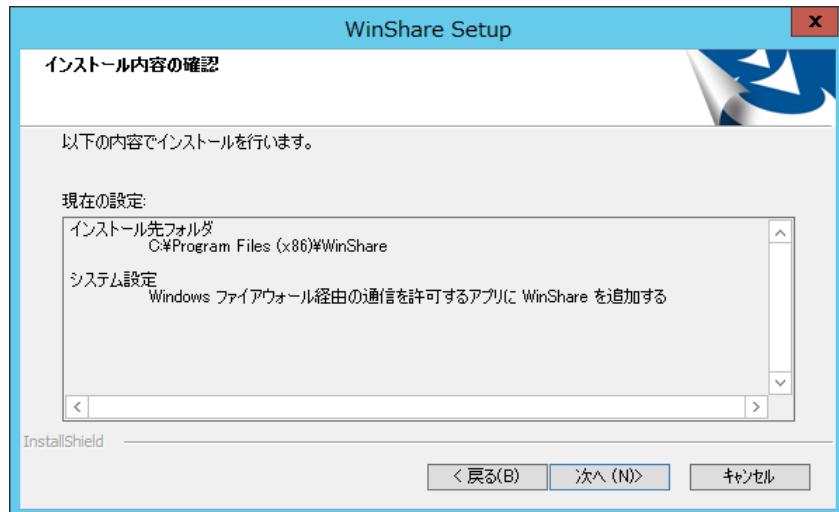
Windows ファイアウォールに「WinShare」という名前のアプリや機能が既に登録されている場合、「Windows ファイアウォール経由の通信を許可するアプリに WinShare を追加する」にチェックを付けても、Windows ファイアウォールに WinShare の情報は追加されません。

その際は、「6.2 Windows ファイアウォール利用時に必要な設定」を参照いただき、手動で Windows ファイアウォールに WinShare の情報を追加してください。

⑤『インストール内容の確認』画面が表示されます。

インストールの内容を確認し、表示された設定で問題ない場合は「インストール」ボタンをクリックしてください。

設定を変更する場合は「戻る」ボタンをクリックし、設定を変更する画面まで戻ってください。

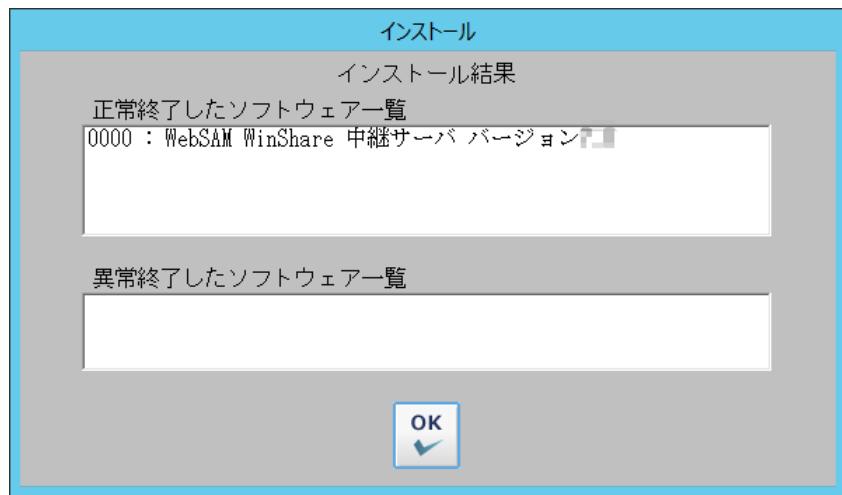


⑥ インストールが完了すると、以下のメッセージが表示されます。

「OK」ボタンをクリックしてください。



- ⑦『インストール』ダイアログの「正常終了したソフトウェア一覧」に、“**WebSAM WinShare 中継サーバ バージョン 7.0**”が表示されていることを確認して、「OK」ボタンをクリックしてください。



- ⑧『WinShare Setup メインメニュー』ダイアログの「終了」ボタンをクリックし、セットアップを終了してください。  
その後、システムの再起動を行ってください。



オペレーション PC が中継サーバに接続する際には、中継サーバに登録されている OS ユーザでの Windows 認証が必要になります。  
なお、該当の OS ユーザにはパスワードが設定されている必要があります。

### 3.2. 電源制御の準備

オペレーション PC からリモート PC の電源制御(電源 ON、OFF、リセット)を行うためには、事前にリモート PC にて Wake on LAN または Intel Active Management Technology(Intel AMT)の設定が必要です。

#### ● Wake on LAN を利用する場合

Wake on LAN を利用すると、オペレーション PC からの電源 ON が可能となります。ただし、オペレーション PC とリモート PC が同一 LAN セグメントに存在しなければなりません。

Wake on LAN を利用するためには、BIOS 設定で「リモートパワーオン」機能を有効にしてください。設定方法は BIOS によって異なりますので、各マシンのマニュアルを参照してください。

#### ● Intel AMT を利用する場合

Intel AMT を利用すると、オペレーション PC からの電源 ON、電源 OFF、リセットが可能となります。

Intel AMT を利用するためには、プロビジョニングと呼ばれる事前設定が必要です。プロビジョニング方法は、各マシンや Intel AMT のバージョンにより異なります。詳しくは、各マシンのマニュアルおよびインテル社のホームページを参照してください。

また、「6.4 Intel Active Management Technology(Intel AMT)のプロビジョニング設定例」に設定例を記載しております。ただし、この設定例は、プロビジョニングが正しく行われることを保証するものではありません。記載している例の通りに設定できない、または設定しても正常に動作しない場合があります。その場合は、各マシンのマニュアルやインテル社から公開されている技術情報を参照し、正しく設定してください。

### 3.3. コンソール接続の準備

オペレーション PC から Windows マシンにコンソール接続する場合は、Windows リモート管理(WinRM)の事前設定が必要です。

なお、使用するマシンが Windows XP、Windows Vista、Windows Server 2003、Windows Server 2003 R2、Windows Server 2008 の場合、OS をインストールしただけでは、PowerShell、および WinRM はインストールされておりませんので、Microsoft のサイトからご使用の OS に合わせた PowerShell をダウンロードし、インストールしてください。

- WinRM は PowerShell のインストール媒体に含まれています。
- PowerShell のバージョンは、2.0 以降をご使用ください。

#### ● オペレーション PC(接続する側)の設定

使用する PowerShell のバージョンにより、以下の手順を実行します。



【PowerShell のバージョンが 3.0 以降】

##### (1) リモート管理を有効にします

管理者として PowerShell を起動し、

「Enable-PSRemoting -SkipNetworkProfileCheck -Force」を実行します。

```
管理者: Windows PowerShell ISE
ファイル(F) 編集(E) 表示(V) ツール(T) デバッグ(D) アドオン(A) ヘルプ(H)
スクリプト

PS C:\Windows\system32> Enable-PSRemoting -SkipNetworkProfileCheck -Force
WinRM は要求を受信するように更新されました。
WinRM サービスの種類を正しく変更できました。
WinRM サービスが開始されました。

WinRM はリモート管理用に更新されました。
WinRM ファイアウォールの例外を有効にしました。
ローカル ユーザーにリモートで管理権限を付与するよう LocalAccountTokenFilterPolicy を構成しました。

PS C:\Windows\system32> |
```

##### (2) 接続先のマシンを Trustedhosts に登録します

管理者として起動した PowerShell から、

「Set-Item WSMan:\localhost\Client\TrustedHosts -Value \* -Force」を実行します。

```
PS C:\Windows\system32> Set-Item WSMan:\localhost\Client\TrustedHosts -Value * -Force  
PS C:\Windows\system32>
```



接続先 PC を個別に指定する場合は、「-Value」の後にホスト名か、IP アドレスを指定します。複数指定する場合は、","(カンマ)で区切って指定します。

例：「-Value xxx.xxx.xxx.xxx , yyy.yyy.yyy.yyy , Host 名」

### (3) ps1 スクリプトの実行を許可します

32bit システムの場合、管理者として PowerShell を起動し、  
「Set-ExecutionPolicy RemoteSigned -Force」を実行します。  
64bit システムの場合、管理者として 32bit 版 PowerShell を起動し、  
「Set-ExecutionPolicy RemoteSigned -Force」を実行します。

```
管理者: Windows PowerShell ISE (x86)  
ファイル(F) 編集(E) 表示(V) ツール(T) デバッグ(D) アドオン(A) ヘルプ(H)  
スクリプト  
PS C:\Windows\system32> Set-ExecutionPolicy RemoteSigned -Force  
PS C:\Windows\system32>
```

### 【PowerShell のバージョンが 2.0】

#### (1) リモート管理を有効にします

管理者として PowerShell を起動し、「Enable-PSRemoting -Force」を実行します。

```
管理者: Windows PowerShell ISE  
ファイル(F) 編集(E) 表示(V) デバッグ(D) ヘルプ(H)  
無題1.ps1 x  
1  
PS C:\Windows\system32> Enable-PSRemoting -Force  
WinRM は要求を受信するように更新されました。  
WinRM サービスの種類を正しく変更できました。  
WinRM サービスが開始されました。  
ローカル ユーザーにリモートで管理権限を付与するよう LocalAccountTokenFilterPolicy を構成しました。  
WinRM はリモート管理用に更新されました。  
このコンピューター上のあらゆる IP への WS-Man 要求を受け付けるため、HTTP://* 上に WinRM リスナーを作成しました。  
WinRM ファイアウォールの例外を有効にしました。  
PS C:\Windows\system32>  
>  
完了 行 1 列 1 12
```



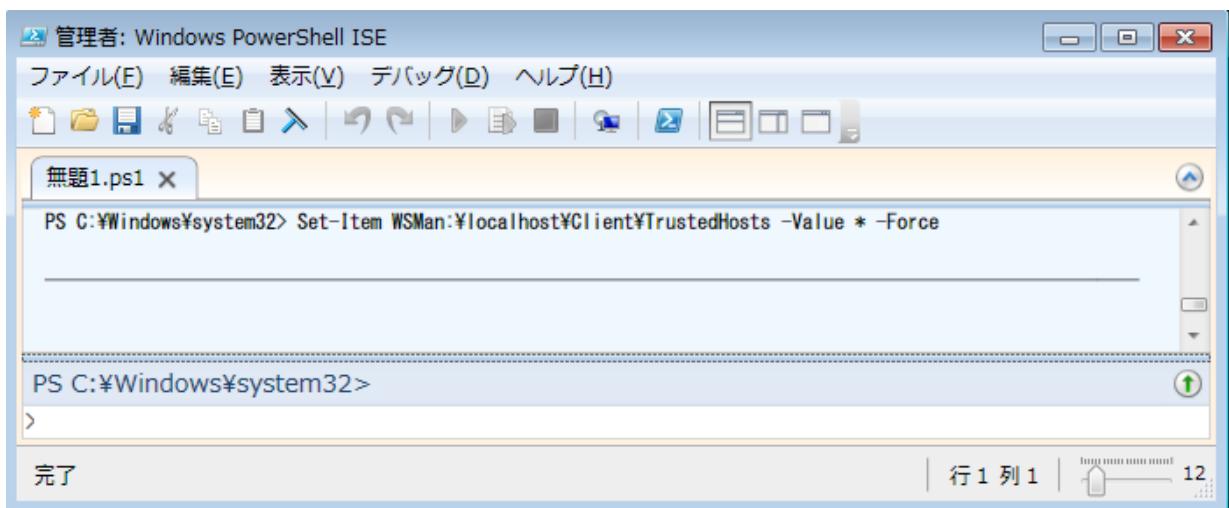
リモート管理有効時に、「このコンピューターのネットワーク接続の種類の 1 つが Public に設定されているため、WinRM ファイアウォール例外は機能しません。ネットワーク接続の種類を Domain または Private に変更して、やり直してください。」が表示され、設定に失敗した場合は、ネットワーク設定にてネットワーク接続の種類を変更し、再度、(1)を実行してください。



## (2) 接続先のマシンを Trustedhosts に登録します

管理者として起動した PowerShell から、

「Set-Item WSMan:\localhost\Client\TrustedHosts -Value \* -Force」を実行します。

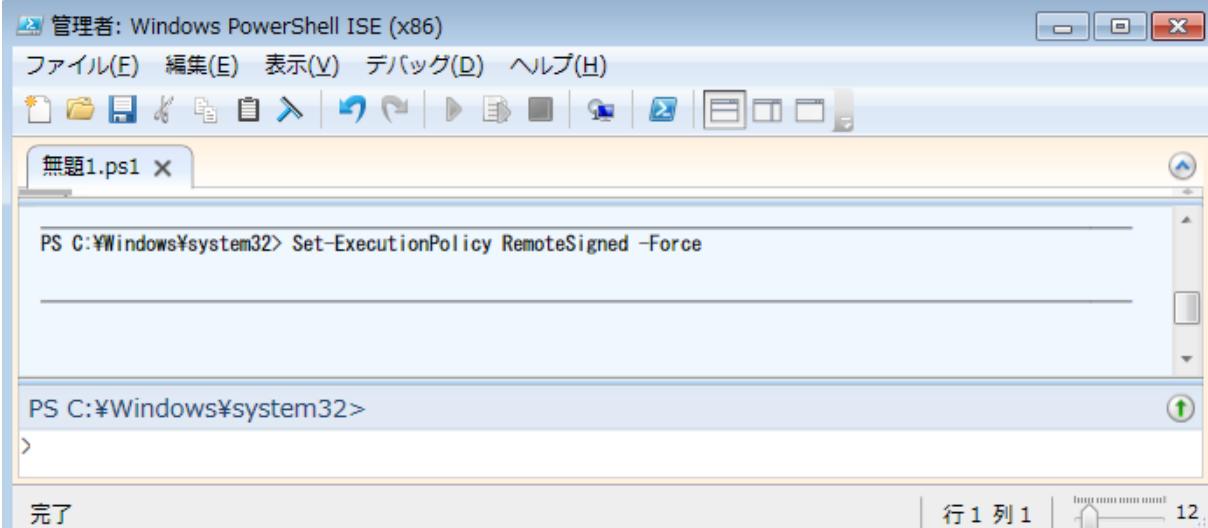


接続先 PC を個別に指定する場合は、「-Value」の後にホスト名か、IP アドレスを指定します。複数指定する場合は、","(カンマ)で区切って指定します。

例：「-Value xxx.xxx.xxx.xxx , yyy.yyy.yyy.yyy , Host 名」

### (3) ps1 スクリプトの実行を許可します

32bit システムの場合、管理者として PowerShell を起動し、  
「Set-ExecutionPolicy RemoteSigned -Force」を実行します。  
64bit システムの場合、管理者として 32bit 版 PowerShell を起動し、  
「Set-ExecutionPolicy RemoteSigned -Force」を実行します。



The screenshot shows the Windows PowerShell ISE interface. The title bar says "管理者: Windows PowerShell ISE (x86)". The menu bar includes "ファイル(F)", "編集(E)", "表示(V)", "デバッグ(D)", and "ヘルプ(H)". Below the menu is a toolbar with various icons. A tab labeled "無題1.ps1" is selected. The main pane displays two lines of PowerShell commands:

```
PS C:\Windows\system32> Set-ExecutionPolicy RemoteSigned -Force
PS C:\Windows\system32>
```

The status bar at the bottom right shows "完了" (Completed), "行 1 列 1", and a font size indicator of "12".

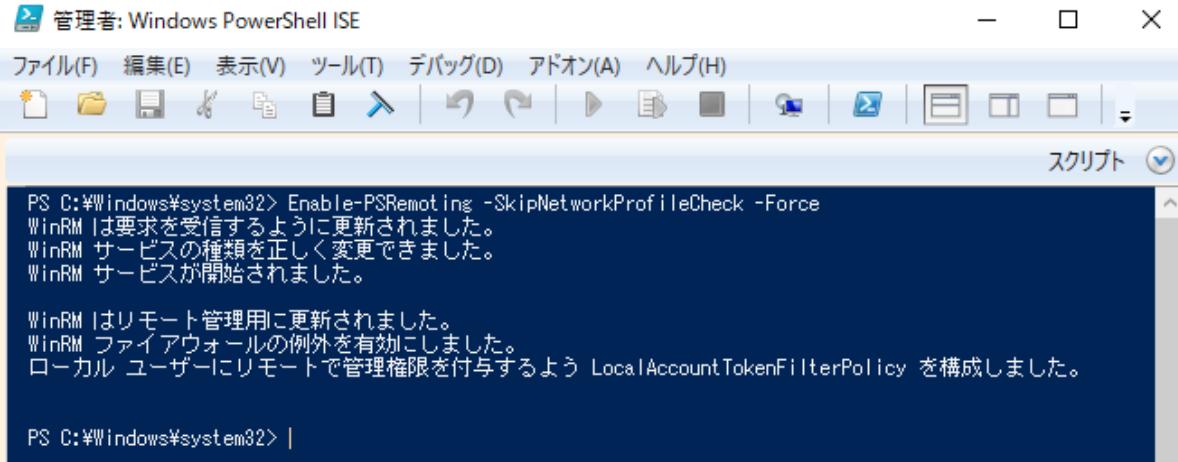
### ● 接続される側のマシンの設定

接続される側のマシンが、Windows XP、Window Vista、Windows 7、Windows 8、Window 10、Windows Server 2003、Windows Server 2003 R2、Windows Server 2008 の場合、リモート管理を有効にする必要があります。

【PowerShell のバージョンが 3.0 以降】

#### (1) リモート管理を有効にします

管理者として PowerShell を起動し、「Enable-PSRemoting -SkipNetworkProfileCheck -Force」を実行します。



The screenshot shows the Windows PowerShell ISE interface. The title bar says "管理者: Windows PowerShell ISE". The menu bar includes "ファイル(F)", "編集(E)", "表示(V)", "ツール(T)", "デバッグ(D)", "アドオン(A)", and "ヘルプ(H)". Below the menu is a toolbar with various icons. A tab labeled "スクリプト" is selected. The main pane displays the output of the command:

```
PS C:\Windows\system32> Enable-PSRemoting -SkipNetworkProfileCheck -Force
WinRM は要求を受信するように更新されました。
WinRM サービスの種類を正しく変更できました。
WinRM サービスが開始されました。

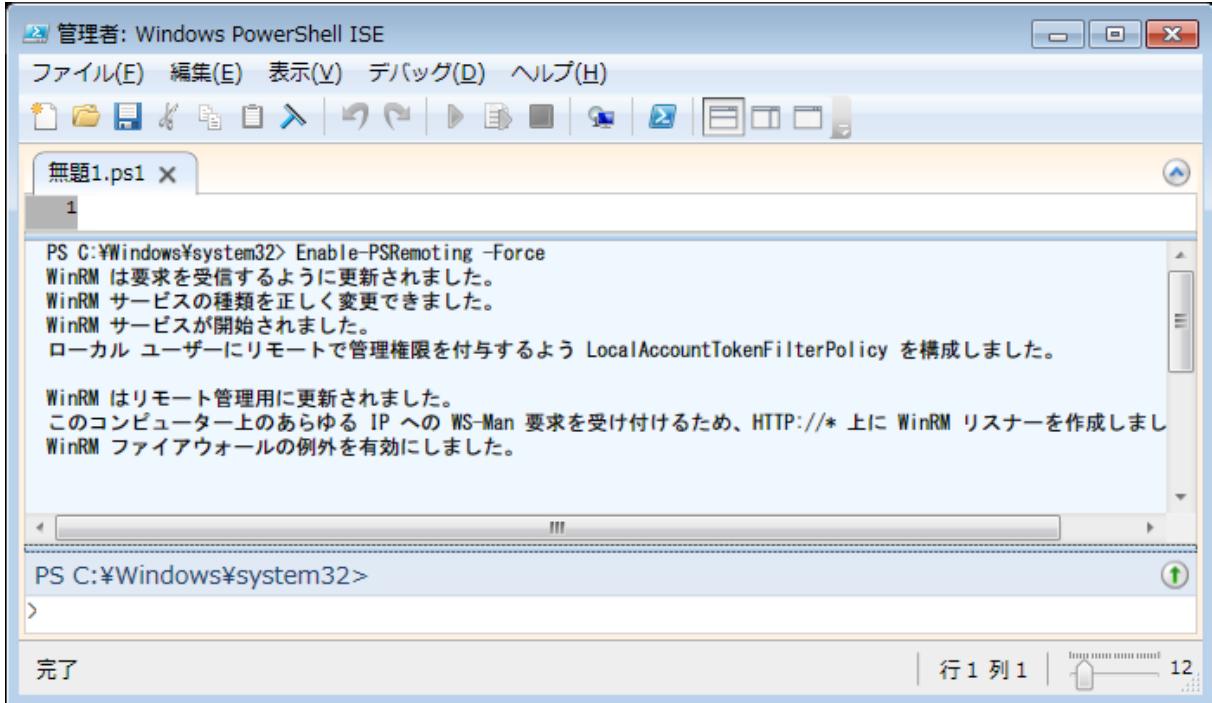
WinRM はリモート管理用に更新されました。
WinRM ファイアウォールの例外を有効にしました。
ローカル ユーザーにリモートで管理権限を付与するよう LocalAccountTokenFilterPolicy を構成しました。

PS C:\Windows\system32> |
```

【PowerShell のバージョンが 2.0】

(1) リモート管理を有効にします

管理者として PowerShell を起動し、「Enable-PSRemoting -Force」を実行します。



```
管理者: Windows PowerShell ISE
ファイル(E) 編集(E) 表示(V) デバッグ(D) ヘルプ(H)
無題1.ps1 x
1
PS C:\Windows\system32> Enable-PSRemoting -Force
WinRM は要求を受信するように更新されました。
WinRM サービスの種類を正しく変更できました。
WinRM サービスが開始されました。
ローカル ユーザーにリモートで管理権限を付与するよう LocalAccountTokenFilterPolicy を構成しました。

WinRM はリモート管理用に更新されました。
このコンピューター上のあらゆる IP への WS-Man 要求を受け付けるため、HTTP:///* 上に WinRM リスナーを作成しました。
WinRM ファイアウォールの例外を有効にしました。

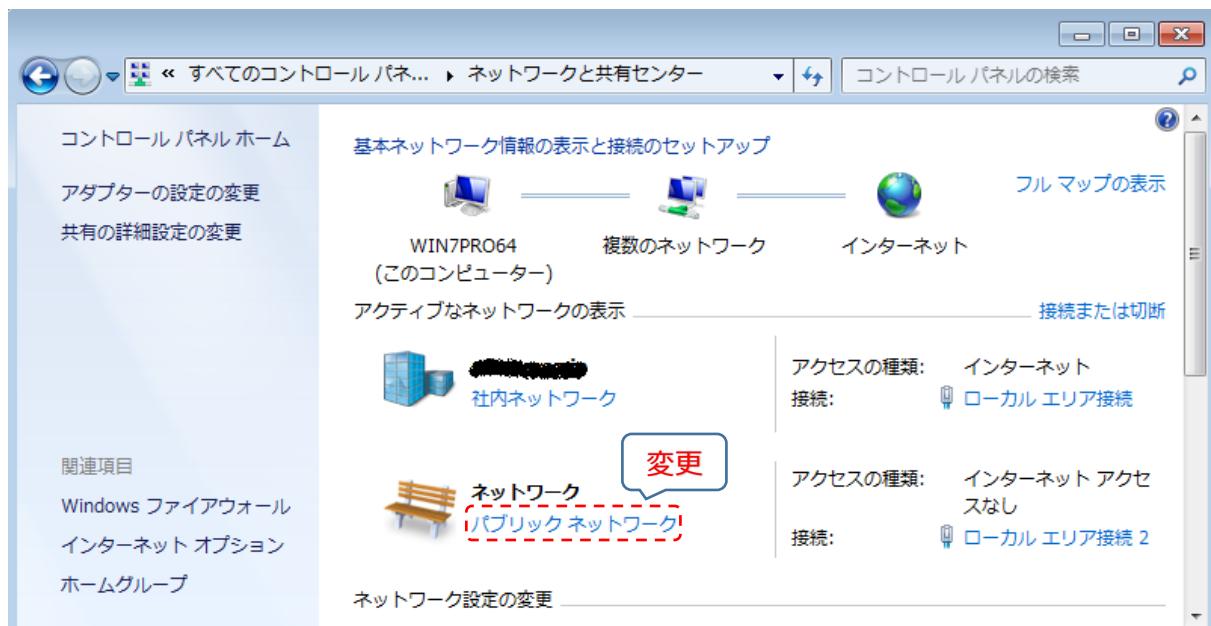
PS C:\Windows\system32>
>
```

完了 | 行 1 列 1 | 12

以上で設定は完了です。



リモート管理有効時に、「このコンピューターのネットワーク接続の種類の 1 つが Public に設定されているため、WinRM ファイアウォール例外は機能しません。ネットワーク接続の種類を Domain または Private に変更して、やり直してください。」が表示され、設定に失敗した場合は、ネットワーク設定にてネットワーク接続の種類を変更し、再度、(1)を実行してください。



## 3.4. アンインストール

### 3.4.1. WinShare オペレーション、WinShare リモート

WinShare のアンインストール手順を説明します。

WinShare オペレーション、WinShare リモートとともに、アンインストールの手順は同一です。



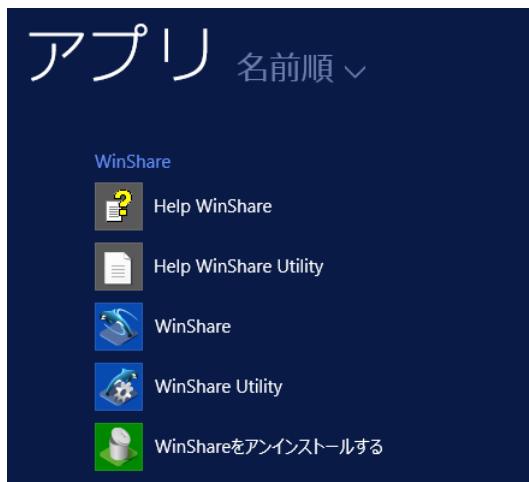
アンインストール作業は、必ず Administrators グループに所属している(管理者権限を持っている)ユーザーで行ってください。



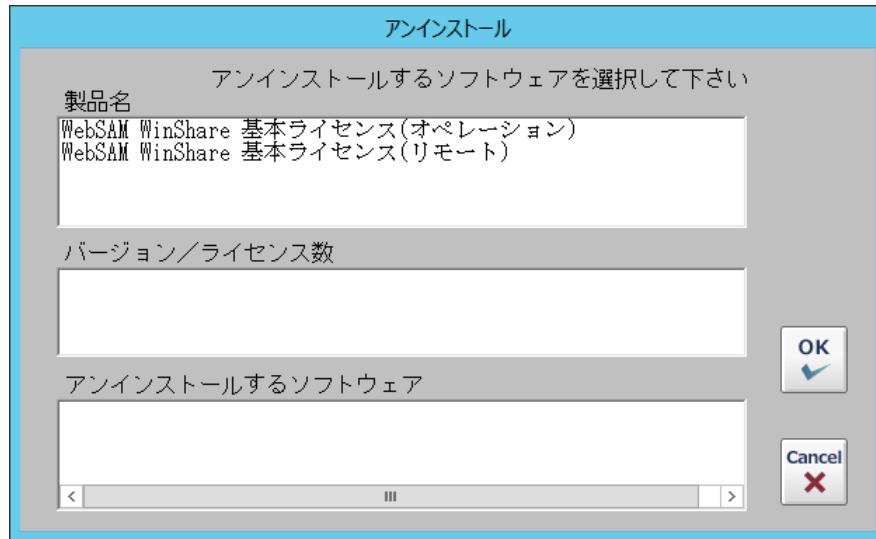
WinShare 中継サーバと WinShare オペレーションもしくは WinShare リモートが共存する環境で、WinShare オペレーションもしくは WinShare リモートを先にアンインストールすると、WinShare 中継サーバが動作できなくなります。また、WinShare 中継サーバがアンインストールできなくなります。

WinShare 中継サーバの継続使用の有無に関わらず、WinShare 中継サーバと WinShare オペレーションもしくは WinShare リモートが共存する環境で WinShare オペレーションもしくは WinShare リモートをアンインストールする場合は、WinShare 中継サーバを先にアンインストールしてください。WinShare 中継サーバを継続使用する場合は、WinShare オペレーションもしくは WinShare リモートのアンインストール後に、改めてインストールし直してください。

- ① スタートメニューやスタート画面のアプリ一覧などから「WinShare をアンインストールする」を選択してください。



- 1) 『アンインストール』ダイアログが表示されます。「製品名」にインストールされている製品名が表示されますので、アンインストールする製品名をダブルクリックしてください。

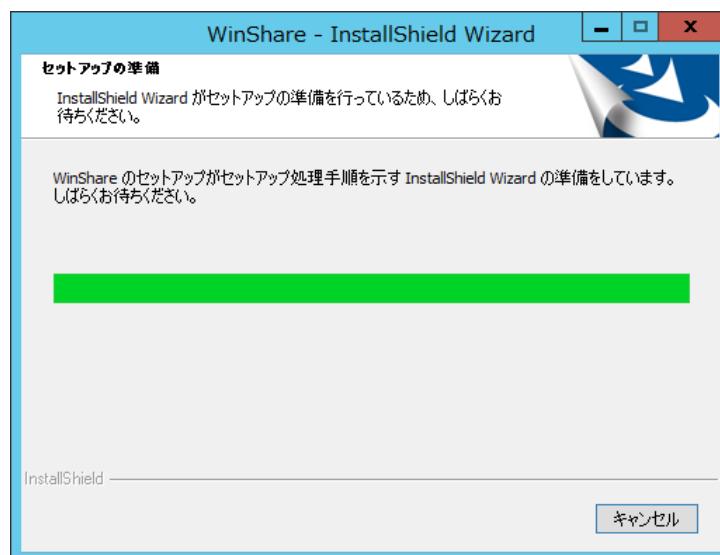


- 2) 「バージョン／ライセンス数」にインストールされているバージョンとライセンス数が表示されます。内容が正しいことを確認し、表示されたバージョン／ライセンス数をダブルクリックしてください。
- 3) 「アンインストールするソフトウェア」にアンインストールするソフトウェアが表示されます。内容が正しいことを確認し、「OK」ボタンをクリックしてください。

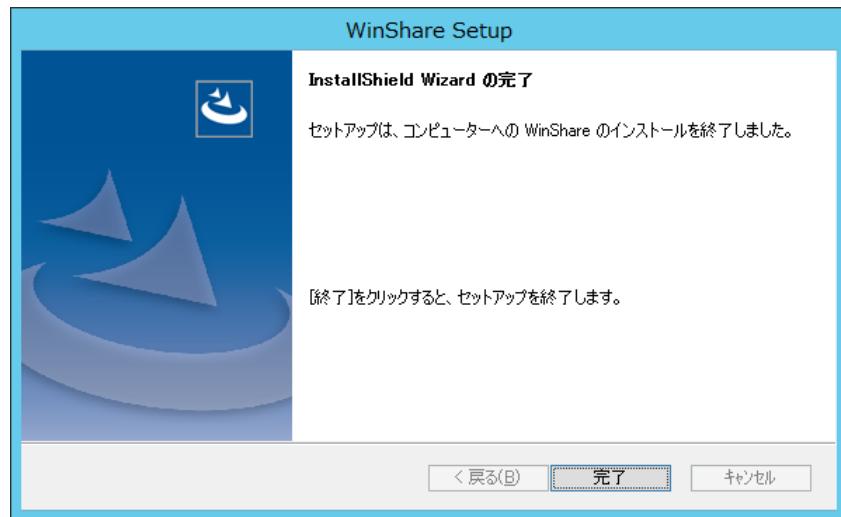


WinShare オペレーションと WinShare リモートがどちらもインストールされている場合は、同時にアンインストールすることも可能です。その場合は、手順 1)～2) を繰り返し、「アンインストールするソフトウェア」に“**WebSAM WinShare オペレーション バージョン 7.0**”と、“**WebSAM WinShare リモート バージョン 7.0**”の両方を表示させた上で、「OK」ボタンをクリックしてください。

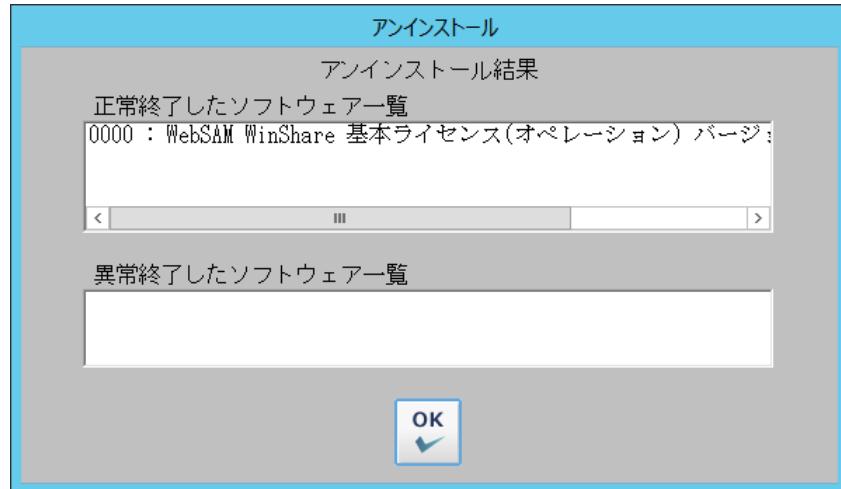
- ② 『セットアップの準備』ダイアログが表示されますので、しばらくお待ちください。  
アンインストールが開始されます。



- ③ アンインストールが完了すると『InstallShield Wizard の完了』ダイアログが表示されます。  
「完了」ボタンをクリックしてください。



- ④『アンインストール』ダイアログの「正常終了したソフトウェア一覧」に、アンインストールしたソフトウェアが表示されていることを確認して、「OK」ボタンをクリックしてください。  
その後、システムの再起動を行ってください。



オペレーション PC とリモート PC の間の通信経路上のファイアウォールに WinShare で利用するポートの透過設定を行われていた場合は、それらの設定を削除してください。

詳細は、「6.1 通信経路上にファイアウォールが存在する場合に必要な設定」をご参照ください。



リモート PC にて、Windows ファイアウォールに WinShare の情報を手動で追加された場合は、追加した情報を削除してください。

詳細は、「6.2 Windows ファイアウォール利用時に必要な設定」をご参照ください。



WinShare リモートのインストール時に、「3.1.2 WinShare リモート」の手順 ⑤ にて、「WinShare による Ctrl+Alt+Del の発生を許可する」にチェックを入れた場合や、リモート PC にて WinShare で Ctrl+Alt+Del 送信を利用するため手動でシステムのポリシー設定を変更していた場合、それらの変更が WinShare のためだけに行っていたのであれば、設定を元に戻してください。

詳細は、「6.3 Ctrl+Alt+Del 送信を利用する際に必要な設定」をご参照ください。

### 3.4.2. WinShare 中継サーバ

WinShare 中継サーバのアンインストール手順を説明します。



アンインストール作業は、必ず Administrators グループに所属している(管理者権限を持っている)ユーザーで行ってください。



WinShare 中継サーバと WinShare オペレーションもしくは WinShare リモートが共存する環境で、WinShare オペレーションもしくは WinShare リモートを先にアンインストールすると、WinShare 中継サーバが動作できなくなります。また、WinShare 中継サーバがアンインストールできなくなります。

WinShare 中継サーバの継続使用の有無に関わらず、WinShare 中継サーバと WinShare オペレーションもしくは WinShare リモートが共存する環境で WinShare オペレーションもしくは WinShare リモートをアンインストールする場合は、WinShare 中継サーバを先にアンインストールしてください。WinShare 中継サーバを継続使用する場合は、WinShare オペレーションもしくは WinShare リモートのアンインストール後に、改めてインストールし直してください。

- ① [コントロール パネル]の[プログラム]から[プログラムのアンインストール]を選択します。
- ② [プログラムと機能]にて、「WebSAM WinShare 中継サーバ」を選択し、[アンインストール]を選択します。

### 3.5. サイレントインストール/アンインストール

WinShare リモートはサイレントインストール/アンインストールを行うことが可能です。

サイレントインストール/アンインストールを行うには、予め WinShare のインストール媒体に格納している「WinShare インストールセット作成ツール」にて「インストールセット」を作成する必要があります。

「インストールセット」を作成し、インストール対象のリモート PC 上から「インストールセット」内の“WSSLINST.exe”を実行することで、サイレントインストールが行われます。

#### ● インストールセットの作成

本節では、WinShare リモートのサイレントインストール/アンインストールに利用するための「インストールセット」の作成方法について説明します。

1) WinShare インストール媒体のルートフォルダにある“WSCREATESL.exe”を起動してください。

『WinShare インストールセット作成ツール』ダイアログが表示されます。



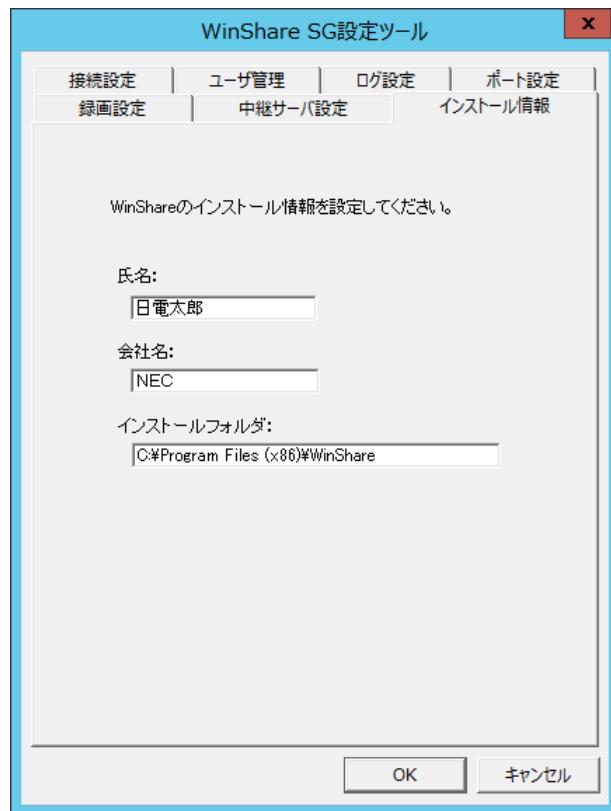
2) 「インストールセットの作成先フォルダ」に、インストールセットを作成するフォルダを絶対パスで入力してください。

【例】C:\WORK\WSINST



3) 「作成」ボタンを押すと、インストールセットの作成のために必要なファイルがインストール媒体からコピーされます。

コピーの完了後、以下の『WinShare SG 設定ツール』が起動します。



各タブにて適宜設定を行なってください。ここで行う設定が、サイレントインストール対象のリモート PC の設定値となります。

なお、以下に記載する「管理者ユーザの作成」と「インストール情報の入力」の設定については必須であり、設定を行わなかった場合は「OK」ボタンを押した際にエラーメッセージが表示されます。

#### 「管理者ユーザの作成」

1. 「ユーザ管理」タブを選択し、管理者とするユーザを作成してください。
2. 「ユーザー一覧」から上記で作成したユーザを選択してください。
3. 「プロパティ」ボタンを押すと「ユーザのプロパティ」ダイアログが表示されますので、「管理者権限を与える」のチェックボックスにチェックをしてください。
4. 「ユーザのプロパティ」ダイアログにて「OK」ボタンを押してください。

#### 「インストール情報の入力」

1. 「インストール情報」タブを選択し、「氏名」、「会社名」、「インストールフォルダ」を入力してください。

※ 『WinShare SG 設定ツール』での設定項目の詳細については、以下のファイルを参照してください。

<WinShare インストールフォルダ>¥SG¥help¥index.html

4) 『WinShare SG 設定ツール』で設定を完了し「OK」ボタンを押すと、以下のメッセージが表示されます。

以上でインストールセットの作成は完了です。



5) 以上でインストールセットの作成は完了です。

「終了」ボタンを押してください。



## ● サイレントインストールの実行

本節では、WinShare リモートのサイレントインストール/アンインストールの実行方法について説明します。

まず、「インストールセット作成ツール」で作成した「インストールセット」を、サイレントインストール/アンインストールを行うリモート PC から参照可能な場所に格納します。

次に、リモート PC からインストールセットのルートフォルダにある“WSSLINST.exe”を起動することで、サイレントインストール/アンインストールが実行されます(ソフトウェア配布ツールなどで「インストールセット」をリモート PC 自体に配付し、“WSSLINST.exe”をローカルで実行しても構いません)。

以下に、“WSSLINST.exe”コマンドの詳細を記載します。

### 形式

サイレントインストール/アンインストールを行うコマンドラインは以下の通りです。

```
WSSLINST.exe { /I | /U } /R
```

※ WSSLINST.exe はインストールセットのルートフォルダに存在します。

### 引数説明

“WSSLINST.exe”コマンドの引数説明です。

引数	説明
/I	サイレントインストールを行います。大文字小文字の区別は行いません。
/U	サイレントアンインストールを行います。大文字小文字の区別は行いません。
/R	必須の引数です。必ず指定してください。

### 戻り値

“WSSLINST.exe”コマンドの戻り値です。

値	内容	対処方法
0	正常終了を示します。	-
0x2001	第1引数、もしくは第2引数が未指定である。	第1引数に /I または /U を指定してください。 第2引数に /R を指定してください。
0x2002	第2引数が不正である。	第2引数に /R を指定してください。
0x2003 0x2004	アンインストール対象の製品がインストールされていない。	アンインストール対象の製品を確認してください。
0x2A00	ファイルのオープンに失敗した。 %windir%\SETUP_EX.LOG	Windowsフォルダに対して書き込みアクセス許可があるかを確認してください。

値	内容	対処方法
0x2A01	ファイルの削除に失敗した。 %windir%\SETUP_EX.LOG	Windowsフォルダに対して変更アクセス許可または削除アクセス許可があるかを確認してください。
0x2A02	外部のセットアップを起動できない。	なし。
0x2A03	外部のセットアップのウィンドウが見つからない。	なし。
0x2A04	外部のセットアップのプロセスが見つからない。	なし。
0x2B06	インストールの権限がない。	管理者権限あるいはシステム権限を持ったユーザで実行し直してください。
0x2F00	SGファイルのコピーに失敗。	なし。
0x2F01	起動フォルダ取得失敗。	なし。
0x2F02	サイレントセットアップのためのSGファイルが見つからない。	なし。
0x2F03	WinShareインストールフォルダの取得失敗。	なし。
0x2F04	グループファイルの分解に失敗。	なし。
0x2F05	Windows フォルダ取得失敗。	なし。
0x2F06	セットアップ実行結果を取得できない。	なし。
0x2F07	セットアップ(Install Shield部)が失敗。	なし。

## 注意事項

本コマンドの実行に伴い、標準出力、標準エラー出力へのメッセージ出力は行いません。

コマンドを実行するユーザは、インストール対象のリモート PC の管理者権限あるいはシステム権限を持ったユーザである必要があります。

## ● SG の変更

「インストールセット」を利用してサイレントインストールを行なった WinShare リモートは、設定ファイルの上書きを行うことで設定内容の変更が可能です。

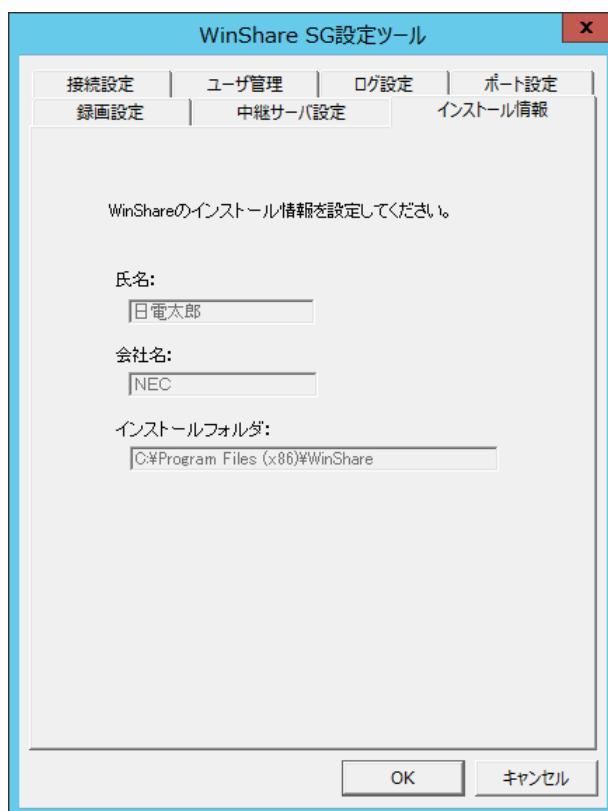
なお、本手順は上記の用途の他、作成済みの「インストールセット」の設定を変更するために用いることも可能です。その場合は 1)~2) までの手順を行ってください。

- 1) 「インストールセット作成ツール」を使用して作成した「インストールセット」内の以下を起動してください。

<インストールセット格納フォルダ>\WinShare\WSSTENV4.exe

- 2) 『WinShare SG 設定ツール』が起動し、以前の設定内容が各タブに表示されます。

設定内容の変更が必要な場合には設定の変更を行い、最後に「OK」ボタンを押してください。



※ 「インストール情報」タブの各設定項目は変更することができません。

※ 「WinShare SG 設定ツール」での設定項目の詳細については、以下のファイルを参照してください。

<WinShare インストール媒体ルート>\SG\help\index.html

3) 『WinShare SG 設定ツール』で「OK」ボタンを押すと、以下のフォルダ配下に設定ファイルが作成されます。

<インストールセット格納フォルダ>¥WinShare

- winshare.cf
- delivery.cf
- wsgroup
- wsrhosts
- ユーザ名.cf
- ユーザ名.rcmd
- ユーザ名.swnd

※ 拡張子が「.cf」、「.rcmd」、「.swnd」のファイルは WinShare のユーザ毎に作成されるため、  
ファイル数は状況により増減します。

4) 3)で作成した全ての設定ファイルを、設定を変更するリモート PC の WinShare のインストールフォルダ配下に上書き  
してください。

システムの再起動後に設定が反映されます。

### 3.6. WinShare セットアップ エラーコード表

値	内容	対処方法
2A00	ファイルのオープンに失敗した。 %windir%\SETUP_EX.LOG	Windows フォルダのアクセス権をご確認ください。
2A01	ファイルの削除に失敗した。 %windir%\SETUP_EX.LOG	表示されておりますファイルのアクセス権をご確認ください。
2A02	外部のセットアップを起動できない。	なし
2A03	外部のセットアップのウィンドウが見つからない。	なし
2A04	外部のセットアップのプロセスが見つからない。	なし
2B06	インストールの権限がない。	管理者権限を持ったユーザでログインし再度セットアップを実行してください。
2B12	WinShare のインストール、アンインストールに失敗しました。	%windir%\SETUP_EX.LOG の内容をご確認ください。

## 4. 注意・制限事項

### 4.1. 注意事項

WinShare V7.0において以下の注意事項があります。

- 1) WebSAM ClientManager クライアントには、WinShare リモートがバンドルされています。WebSAM ClientManager クライアントがインストールされているマシンに、WinShare リモートを上書きインストールした場合は、WinShare リモートのサービス「WinShare Delivery Service」の起動属性(スタートアップの種類)を「自動」に変更した上でご利用ください。
- 2) オペレーション PC とリモート PC とともに V6.1 以降の場合、全ての通信内容が AES256 で暗号化されます。リモート PC 側の設定により V6.0 以前のオペレーション PC からの接続を許可することもできますが、その場合は V6.0 以前のオペレーション PC との通信内容は AES256 で暗号化されませんのでご注意ください。接続を許可する場合は、WinShare ユーティリティの「接続設定」タブにおいて、「Ver6.0 以前のオペレーション PC からの接続を拒否する」のチェックを外してください。なお、本設定項目は、新規インストール時はデフォルトではチェックが付いていません(接続を許可する設定になっています)。
- 3) WinShare ユーティリティの「接続設定」タブにおいて、「アクセスホストに登録されていないオペレーション PC からの接続を拒否する」にチェックする場合は、「アクセスホスト管理」ボタンを押下して接続を許可するオペレーション PC を必ず一つ以上登録してください。登録されていない場合、全てのオペレーション PC から接続できない状態になります。
- 4) WinShare ユーティリティの「ユーザ設定の詳細」ダイアログにて、「リモート PC のユーザへの確認」が「確認してから接続する」に設定されているユーザが WSFT(ファイル転送機能)でリモート PC に接続した場合、「接続確認」ダイアログはいかなる場合でもリモート PC のコンソールセッションに表示されます。
- 5) リモート PC のリモートセッションに接続する場合、リモートセッションのディスプレイ解像度と色数は、WinShare の動作要件を満たす必要があります。
- 6) WinShare V6.2において、リモート PC が出力するログの種類、および形式が変更になりました。そのため、リモート PC を旧バージョンから V6.2 以降にバージョンアップした場合、旧バージョンで設定していたログの設定情報は引き継がれませんのでご注意ください。リモート PC にて各種ログを出力する場合は、WinShare ユーティリティの「ログ設定」タブで改めて設定を行ってください。
- 7) リモート PC がマルチディスプレイ環境の場合、リモート PC 側のコントロール パネルなどで表示されるディスプレイの識別番号と、リモート操作中に WinShare クライアントの「ステータスバー」に表示されるディスプレイ番号が一致しないことがあります。
- 8) WinShare でリモート PC のコンソールセッションに接続し、OS へのログオン操作を実行した際に WinShare の再接続が発生する場合があります。この時、再接続の直前に録画していたファイルが正しく作成されない場合があります。
- 9) リモート PC が Windows 10、Windows Server 2016 の場合、以下の注意事項があります。
  - Windows 10 が Windows 10 バージョン 1607(Anniversary Update)以前の場合、NAVIPAD の文字入力で日本語を入力することができない場合があります。NAVIPAD の文字入力で日本語を入力するには、

Anniversary Update(バージョン 1607)を適用後、「2017-05 Windows 10 Version 1607 の累積更新プログラム (KB4019472)」を適用してください。

- Windows Server 2016 では、NAVIPAD の文字入力で日本語を入力することができない場合があります。 NAVIPAD の文字入力で日本語を入力するには、「2017-05 Windows Server 2016 の累積更新プログラム (KB4019472)」を適用してください。
- 10) 中継サーバを経由したリモート操作は、オペレーション PC、リモート PC がともに V7.0 以降の場合にのみご利用いただけます。
- 11) Windows マシンへのコンソール接続を終了させる場合には、Windows PowerShell の画面に EXIT を入力して終了させてください。ウインドウの×ボタンで終了させると、不要な cmd.exe プロセスが残ります(不要なプロセスは残りますが、コンソール接続は続けて使用できます。また、不要なプロセスは、サインアウト、もしくはマシンを停止することで削除されます)。
- 12) WinShare 中継サーバと WinShare オペレーションもしくは WinShare リモートが共存する環境で、WinShare オペレーションもしくは WinShare リモートを先にアンインストールすると、WinShare 中継サーバが動作できなくなります。また、WinShare 中継サーバがアンインストールできなくなります。WinShare 中継サーバの継続使用の有無に関わらず、WinShare 中継サーバと WinShare オペレーションもしくは WinShare リモートが共存する環境で WinShare オペレーションもしくは WinShare リモートをアンインストールする場合は、WinShare 中継サーバを先にアンインストールしてください。WinShare 中継サーバを継続使用する場合は、WinShare オペレーションもしくは WinShare リモートのアンインストール後に、改めてインストールし直してください。
- 13) WinShare オペレーションがインストールされているマシンに WebSAM ClientManager V4.33 の CM マネージャを後からインストールすると、WinShare オペレーションが正しく動作できなくなります。WinShare オペレーションと WebSAM ClientManager V4.33 の CM マネージャを共存させる場合は、CM マネージャをインストールした後に WinShare オペレーションをインストールしてください。WinShare オペレーションを既にインストールしている場合は、CM マネージャをインストールした後、WinShare オペレーションを上書きインストールしてください。

## 4.2. 制限事項

WinShare V7.0において以下の制限事項があります。

- 1) WinShare オペレーションと WinShare リモートを 1 台のマシンに共存させることは可能ですが、共存させる場合は同じバージョンをインストールする必要があります。
- 2) 簡易ユーザ切り替え機能によりユーザを切り替えた場合、切り替え前にリモート PC に接続中だったオペレーション PC の操作画面が真っ黒な状態となります。この場合、接続し直すことで切り替わったユーザの画面の表示・操作が可能になります。ただし、アクティブなユーザのセッション ID が 16 以上の状態では表示・操作ができません。
- 3) ログオン画面、セキュリティ画面およびようこそ画面では、操作モードを「抑止モード」に変更することはできません。
- 4) Windows のログオン画面に接続して WinShare のリモート操作によりログオンし、ログオンユーザのデスクトップ画面に切り替わった際にリモート操作ができなくなる場合があります。この場合、接続し直すことでリモート操作が可能になります。
- 5) オートズーム中、あるいは画像の大きさのユーザ指定値により、オペレーション PC 側の操作画面に白い線が表示される場合があります。この白い線はリモート操作自体には支障ありませんが、気になる場合は WinShare クライアントの「動作設定」にて、画像の大きさを固定倍率(100%、75%、50%)にしてご利用ください。
- 6) ログオン/ロック解除のリモート PC に接続して実際にパスワード入力するまでに、リモート PC の CAPS/かな状態が変更された場合、パスワード入力に失敗する場合があります。このような場合は、接続し直してください。
- 7) ファイル転送機能では、ネットワークドライブに対するファイル送受信は行えません。
- 8) リモート PC が高 DPI 設定の場合、リモート PC 側のウィンドウをドラッグした際に表示される枠(ラバーバンド)がオペレーション PC 側の操作画面に正しく描画されないことがあります。
- 9) リモート PC がタッチパネル環境の場合、操作モードを「抑止モード」にしてもタップやスワイプなどのタッチ操作は抑止されません。
- 10) Windows Vista、Windows Server 2008 以降の場合、以下の制限事項があります。
  - WinShare の GUI 上に表示される文字列(例えば、リモート PC の登録名など)や、クリップボード転送機能で用いるデータなど、WinShare が取り扱うデータに JIS2004 固有文字が含まれている場合、文字化けが発生するなどの問題が生じます。この問題は、Windows Vista、Windows 7、Windows Server 2008、Windows Server 2008 R2 においては、以下のいずれかの対処を行うことで回避可能です。
    1. IME での入力範囲を JIS90 に制限  
IME プロパティ→「変換」タブ→「変換文字制限」にて、「JIS X 0208 文字で構成された単語/文字のみ変換候補に表示する」をチェックする。
    2. Microsoft 社から提供されている JIS90 互換フォントをインストール  
Microsoft 社のホームページのダウンロードセンターから「KB927490」を検索して、表示されたページに従いインストールする。
- 11) リモート PC が Windows 10、Windows Server 2016 以降の場合、以下の制限事項があります。
  - リモート操作中に「スタートメニュー」や「Microsoft Edge」、その他「Windows ストアアプリ(UWP アプリ)」を操

作すると、オペレーション PC 側での画面更新が遅延する場合があります。この場合、WinShare クライアントの「動作設定」にて、画面更新間隔を 0.5 秒以下に設定することで遅延が低減されます。尚、画面更新間隔を短くすると CPU 使用率が高くなる場合がありますので、環境に応じて調整をお願いします。

- オペレーション PC からのタッチパネルによるリモート操作は行えません。

12) 1 台の中継サーバに同時に接続できるリモート PC は 10 台までとなります。また、中継サーバを経由してリモート PC に接続できるオペレーション PC は同時に 2 台までとなります。

13) Linux マシンへのコンソール接続を行う場合、Tera Term をデフォルトのインストールフォルダ（[%PROGRAMFILES%]\teraterm、もしくは[%PROGRAMFILES(x86)%]\teraterm）以外にインストールする場合、以下のレジストリにインストールフォルダを指定する必要があります。

32bit システム : HKEY\_LOCAL\_MACHINE\SOFTWARE\NEC\WinShareVer2\Client

64bit システム : HKEY\_LOCAL\_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node\NEC\WinShareVer2\Client

キー名 : tt\_home

種類 : REG\_SZ

データ : Tera Term のインストールフォルダ

## 5. 障害発生時の情報採取について

障害が発生した場合は、迅速な解析を行うため以下の情報の採取をお願いいたします。

### ● オペレーション PC/リモート PC 共通

- ・一括情報採取ツール(WSSLTLOG.exe)で採取した情報

<WinShare インストールフォルダ>\Tools 配下にある一括情報採取ツール(WSSLTLOG.exe)を実行して情報を探取してください。ツールの詳細は同フォルダにある WSSLTLOG\_readme.txt をご参照ください。

- ・Windows エラー報告(WER)の出力するクラッシュダンプ（ユーザーダンプ）
- ・どのような操作をした際に障害が発生したのかなどの操作手順
- ・ハードウェア、OS の情報

例：

オペレーション PC

H/W: PC-MK32MEZNG  
CPU: Intel(R) Core(TM) i5-4570 3.20GHz  
Memory: 8GB  
OS: Windows 10 Pro (x64)

リモート PC

H/W: Express5800/GT110g  
CPU: Xeon E3-1220v3 3.10GHz 2 個  
Memory: 32GB  
OS: Windows Server 2012 R2 Standard

### ● リモート PC

障害に再現性がある場合、WinShare のインストールフォルダ配下にある winshare.cf ファイルに以下の 3 行を追加して障害を再現させてください。指定したファイルに動作ログが出力されますので、それを採取してください。

ログは winshare.cf ファイルを更新した瞬間から出力されます。採取が終りましたら、追加した行を削除してください。

--追加する行ここから--

```
DEV_LOG = 1
DEV_LOG_TO = "c:\program files\winshare\devlog.txt"
DEV_LOG_LIMIT = 0x1f4000
```

--追加する行ここまで--

#### 【説明】

DEV\_LOG = 1 とするとログを取得します。0では取得しません。  
DEV\_LOG\_TO = ログファイルのパス名を指定します。  
DEV\_LOG\_LIMIT = ログファイルのサイズ(バイト数)を指定します。  
かならず0x形式の16進数で指定してください。  
例えば、0x1f4000では2MBのログを残す設定となります。  
2MBで約30秒間の操作を記録できます。  
再現させる操作内容に合わせてサイズを指定してください。

## 6. 参考

### 6.1. 通信経路上にファイアウォールが存在する場合に必要な設定

リモート PC とオペレーション PC 間の通信経路上にファイアウォールが設置されている場合は、下記ポートの透過設定を行ってください。なお、ご利用されている WinShare のバージョンやご利用用途によって透過設定が必要なポートが異なりますのでご注意ください。



ここに記載している情報はデフォルト設定時のものになります。WinShare が利用するポートを変更している場合は、変更後のポートを透過設定する必要があります。

- オペレーション PC／リモート PC がともに V7.0 以降で中継サーバを利用する場合に使用するポート

用途	オペレーション PC	セッションの方向 ※1	中継サーバ	セッションの方向 ※	リモート PC	識別名
リモート操作／ファイル転送	ANY	→	31300/TCP	←	ANY	Connect Port

※1 セッションの方向

→：オペレーション PC から中継サーバに対してセッションを張ります。

←：リモート PC から中継サーバに対してセッションを張ります。

- オペレーション PC／リモート PC がともに V6.1 以降の場合に使用するポート

用途	オペレーション PC	セッションの方向 ※1	リモート PC	識別名
リモート操作／ファイル転送	ANY	→	31300/TCP	Connect Port
電源制御(AMT)	ANY	→	16992/TCP	AMT

※1 セッションの方向

→：オペレーション PC からリモート PC に対してセッションを張ります。

- オペレーション PC／リモート PC がともに V6.01、もしくは V6.01 と V6.1 以降の組み合わせの場合に使用するポート

用途	オペレーション PC	セッションの方向 ※1	リモート PC	識別名
リモート操作	ANY	→	5025/TCP	Client to Manager
	ANY	→	5027/TCP	Client to Server 1

	ANY	→	5028/TCP	Client to Server 2
ファイル転送	ANY	→	3000/TCP	CMIT API
	ANY	→	4935/TCP	CMIT WSFT1
	ANY	→	5935/TCP ※2	CMIT WSFT2
電源制御(AMT)	ANY	→	16992/TCP	AMT

※1 セッションの方向

→ : オペレーション PC からリモート PC に対してセッションを張ります。

※2 リモート PC が Ver6.1 以降の場合は使用しません。

#### ● オペレーション PC／リモート PC のどちらかが V6.00 以前の場合に使用するポート

用途	オペレーション PC	セッションの方向 ※1	リモート PC	識別名
リモート操作	ANY	→	5025/TCP	Client to Manager
	ANY	→	5027/TCP	Client to Server 1
	ANY	→	5028/TCP	Client to Server 2
ファイル転送	ANY	→	3000/TCP	CMIT API
	ANY	→	4935/TCP	CMIT WSFT1
	ANY	→	5935/TCP ※2	CMIT WSFT2
	4935/TCP	←	ANY	CMIT WSFT1
電源制御(AMT)	ANY	→	16992/TCP	AMT

※1 セッションの方向

→ : オペレーション PC からリモート PC に対してセッションを張ります。

← : リモート PC からオペレーション PC に対してセッションを張ります。

※2 リモート PC が Ver6.1 以降の場合は使用しません。

## 6.2. Windows ファイアウォール利用時に必要な設定

Windows ファイアウォール経由の通信を許可するアプリに手作業で WinShare の情報を追加する必要がある際は、以下の記載を参考に作業を行ってください。



WinShare のデフォルトのインストールフォルダは以下の通りです。

32bit システム : C:\Program Files\WinShare

64bit システム : C:\Program Files (x86)\WinShare

- オペレーション PC／リモート PC がともに V6.1 以降の場合

- ・ オペレーション PC で通信を許可するプログラム  
なし
- ・ リモート PC で通信を許可するプログラム
  - 1. <WinShare インストールフォルダ>\wsdelivery.exe
- ・ 中継サーバで通信を許可するプログラム(V7.0 以降で中継サーバを利用する場合のみ)
  - 1. <WinShare インストールフォルダ>\wsdelivery.exe

- オペレーション PC／リモート PC がともに V6.01、もしくは V6.1 以降と V6.01 の組み合わせの場合

- ・ オペレーション PC で通信を許可するプログラム  
なし
- ・ リモート PC で通信を許可するプログラム
  - ✓ V6.1 以降
    - 1. <WinShare インストールフォルダ>\wsdelivery.exe
  - ✓ V6.01
    - 1. <WinShare インストールフォルダ>\wsmanager.exe
    - 2. <WinShare インストールフォルダ>\wsserver.exe
    - 3. <WinShare インストールフォルダ>\ESMPROWSR\Bin\CMIT.exe ※
    - 4. <WinShare インストールフォルダ>\ESMPROWSR\Bin\LGONCMIT.exe ※

※ 同じマシン内に WinShare オペレーションもインストールしていると、上記 3 と 4 のファイルが存在しない場合があります。その際は以下のプログラムの通信を許可してください。

<WinShare インストールフォルダ>\ESMPROWSO\Bin\CMIT.exe

<WinShare インストールフォルダ>\ESMPROWSO\Bin\LGONCMIT.exe

## ● オペレーション PC／リモート PC のどちらかが V6.00 以前の場合

- ・ オペレーション PC で通信を許可するプログラム
  - ✓ V6.1 以降
    1. <WinShare インストールフォルダ>\wsdelivery.exe
  - ✓ V6.01 以前
    1. <WinShare インストールフォルダ>\ESMPROWSO\Bin\CMIT.exe ※

※ 同じマシン内に WinShare オペレーションもインストールしていると、上記 1 のファイルが存在しない場合があります。その際は以下のプログラムの通信を許可してください。

<WinShare インストールフォルダ>\\_ESMPROWSR\Bin\CMIT.exe

- ・ リモート PC で通信を許可するプログラム
  - ✓ V6.1 以降
    1. <WinShare インストールフォルダ>\wsdelivery.exe
  - ✓ V6.01 以前
    1. <WinShare インストールフォルダ>\wsmanager.exe
    2. <WinShare インストールフォルダ>\wsserver.exe
    3. <WinShare インストールフォルダ>\ESMPROWSR\Bin\CMIT.exe ※
    4. <WinShare インストールフォルダ>\ESMPROWSR\Bin\LGONCMIT.exe ※

※ 同じマシン内に WinShare オペレーションもインストールしていると、上記 3 と 4 のファイルが存在しない場合があります。その際は以下のプログラムの通信を許可してください。

<WinShare インストールフォルダ>\\_ESMPROWSO\Bin\CMIT.exe

<WinShare インストールフォルダ>\\_ESMPROWSO\Bin\LGONCMIT.exe

プログラムではなく、通信を許可するポートを指定する場合には、オペレーション PC、リモート PC のそれぞれで下記ポートの通信を許可してください。



ここに記載している情報はデフォルト設定時のものになります。WinShare が利用するポートを変更している場合は、変更後のポートを透過設定する必要があります。

## ● オペレーション PC／リモート PC がともに V6.1 以降の場合

- ・ オペレーション PC で通信を許可するポート
  - なし
- ・ リモート PC で通信を許可するポート
  1. 31300/TCP(Connect Port)
- ・ 中継サーバで通信を許可するポート(V7.0 以降で中継サーバを利用する場合のみ)
  1. 31300/TCP(Connect Port)

- オペレーション PC／リモート PC がともに V6.01、もしくは V6.1 以降と V6.01 の組み合わせの場合

- ・ オペレーション PC で通信を許可するポート  
なし
- ・ リモート PC で通信を許可するポート
  - ✓ V6.1 以降
    1. 3000/TCP(CMIT API)
    2. 4935/TCP(CMIT WSFT1)
    3. 5025/TCP(Client to Manager)
    4. 5027/TCP(Client to Server1)
    5. 5028/TCP(Client to Server2)
  - ✓ V6.01
    1. 3000/TCP(CMIT API)
    2. 4935/TCP(CMIT WSFT1)
    3. 5025/TCP(Client to Manager)
    4. 5027/TCP(Client to Server1)
    5. 5028/TCP(Client to Server2)
    6. 5935/TCP(CMIT WSFT2)

- オペレーション PC／リモート PC のどちらかが V6.00 以前の場合

- ・ オペレーション PC で通信を許可するポート
  - ✓ V6.00 以前
    1. 4935/TCP(CMIT WSFT1)
  - ・ リモート PC で通信を許可するポート
    - ✓ V6.1 以降
      1. 3000/TCP(CMIT API)
      2. 4935/TCP(CMIT WSFT1)
      3. 5025/TCP(Client to Manager)
      4. 5027/TCP(Client to Server1)
      5. 5028/TCP(Client to Server2)
    - ✓ V6.01 以前
      1. 3000/TCP(CMIT API)
      2. 4935/TCP(CMIT WSFT1)
      3. 5025/TCP(Client to Manager)
      4. 5027/TCP(Client to Server1)
      5. 5028/TCP(Client to Server)
      6. 5935/TCP(CMIT WSFT2)

### 6.3. Ctrl+Alt+Del 送信を利用する際に必要な設定

リモート PC が Windows Vista、Windows Server 2008 以降の場合、システム標準のポリシー設定では、オペレーション PC から Ctrl+Alt+Del 送信を行ってもリモート PC で Ctrl+Alt+Del が再現されません。

WinShare V6.2 以降のセットアップではインストール時にシステムのポリシー設定の変更を自動で行うことが可能ですが、「3.1.2 WinShare リモート」のインストール手順 ⑤ にて、「WinShare による Ctrl+Alt+Del の発生を許可する」にチェックを付けなかった場合など、手作業でシステムのポリシー設定の変更を行う場合は、以下の記載を参考に作業を行ってください。

1. リモート PC にて「ローカル グループ ポリシー エディター」("gpedit.msc")を起動
2. 「コンピューターの構成」→「管理用テンプレート」→「Windows コンポーネント」→「Windows ログオンのオプション」→「ソフトウェアの Secure Attention Sequence を無効または有効にする」を開き、「有効」を選択
3. オプションの「Secure Attention Sequence の生成が許可されるソフトウェアを設定する」にて、一覧から「サービス」を選択
4. 「OK」ボタンを押下



「3.1.2 WinShare リモート」のインストール手順 ⑤ にて、「WinShare による Ctrl+Alt+Del の発生を許可する」にチェックを付けた場合、システムのポリシー設定は変更されています(ソフトウェアの Secure Attention Sequence は有効になっています)が、「ローカル グループ ポリシー エディター」の「ソフトウェアの Secure Attention Sequence を無効または有効にする」では、「未構成」、または「無効」が選択されている場合があります。

WinShare のアンインストール時などにシステムのポリシー設定を元に戻す場合は、「ソフトウェアの Secure Attention Sequence を無効または有効にする」にて「無効」を選択し、[OK]ボタンを押下してください。

なお、リモート PC がドメインに参加しており、ドメインのポリシー設定にて動作している場合は、ドメインのポリシー設定を変更する必要があります(ドメインのポリシー設定の方がシステムのポリシー設定より優先度が高いためです)。ドメインのポリシー設定を変更する場合は、以下の記載を参考に作業を行ってください。

1. 「グループ ポリシーの管理」("gpmc.msc")が利用できるマシンにドメイン管理者でログオン
2. 「グループ ポリシーの管理」("gpmc.msc")を起動
3. 「グループ ポリシーの管理」から対象のドメインを選択し、該当するグループ ポリシー オブジェクトを右クリックして「編集」を選択
4. 「コンピューターの構成」→「管理用テンプレート」→「Windows コンポーネント」→「Windows ログオンのオプション」→「ソフトウェアの Secure Attention Sequence を無効または有効にする」を開き、「有効」を選択
5. オプションの「Secure Attention Sequence の生成が許可されるソフトウェアを設定する」にて、一覧から「サービス」を選択
6. 「OK」ボタンを押下
7. リモート PC を再起動



リモート PC が Windows Vista、Windows Server 2008 以降で、ユーザー アカウント制御の設定を既定値から変更(「通知しない」に設定)している場合も Ctrl+Alt+Del 送信が使用できません。Ctrl+Alt+Del 送信を使用する場合は、以下の通りユーザー アカウント制御の設定を変更してください。

1. リモート PC にて「コントロール パネル」を表示
2. 「ユーザー アカウント」→「ユーザー アカウント制御設定の変更」を選択
3. 左側に表示されるスライダーを一番下の「通知しない」より上に設定
4. 「OK」ボタンを押下

## 6.4. Intel Active Management Technology(Intel AMT)のプロビジョニング設定例

Intel AMT のプロビジョニング(事前設定)例を示します。ただし、プロビジョニング方法は、PC の機種、AMT のバージョン、設定ツールのバージョンによって異なります。この例の通りに設定しても正常に動作しない場合があります。その場合は、各 PC のマニュアル、インテル社から公開されている情報を参照して、正しく設定を行ってください。

プロビジョニング方法には、インテル社が提供しているツールを使用する方法と、拡張 BIOS(MEBx)を直接操作して設定する方法の 2 通りの方法があります。この項ではインテル社が提供する、Intel AMT SCS(Setup and Configuration Software)および USB メモリを用いた設定方法を説明します。拡張 BIOS を直接操作する方法につきましては、各 PC のマニュアルを参照してください。

### ● Intel AMT SCS について

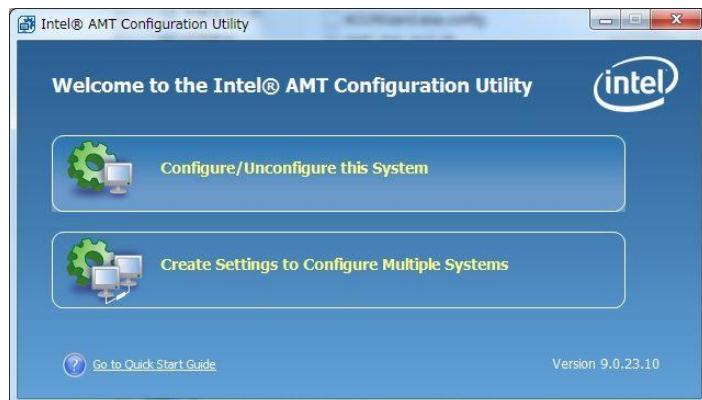
Intel AMT SCS を用意してください。このソフトウェアは AMT に対してプロビジョニングを行うためのツールです。このツールは、ダウンロードしたファイルを任意のフォルダに展開すれば、インストールなどは不要です。ダウンロードは以下の URL から行なうことが可能です。

[https://downloadcenter.intel.com/Detail\\_Desc.aspx?agr=Y&DwnldID=20921](https://downloadcenter.intel.com/Detail_Desc.aspx?agr=Y&DwnldID=20921)

### ● USB Key を使用してプロビジョニングを行う方法

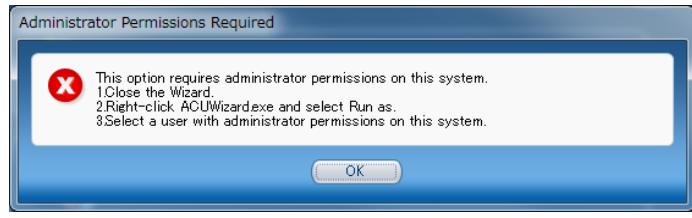
Intel AMT SCS は 6.0 以降から USB Key を使用したプロビジョニングがサポートされています。ここでは USB Key を使用したプロビジョニング手順について説明します。

- 1) 展開したフォルダ配下の Intel AMT SCS フォルダ内の ACU\_Wizard に移動してください。フォルダ内の "ACUWizard.exe" を右クリックし、「管理者で実行」を選択してください。この時、変更を許可するかどうかを聞かれますが、「はい」を選択してください。
- 2) 「Intel AMT Configuration Utility」ダイアログが表示されたら、「Configure/Unconfigure this System」(現在のシステムを対象とした構成)をクリックしてください。



#### ※ 注意 1

- 2) で、管理者として実行していない場合は、以下の図のようなメッセージが表示されます。「OK」を押して現在表示されているダイアログを閉じ、「ACUWizard.exe」を管理者で実行し直してください。

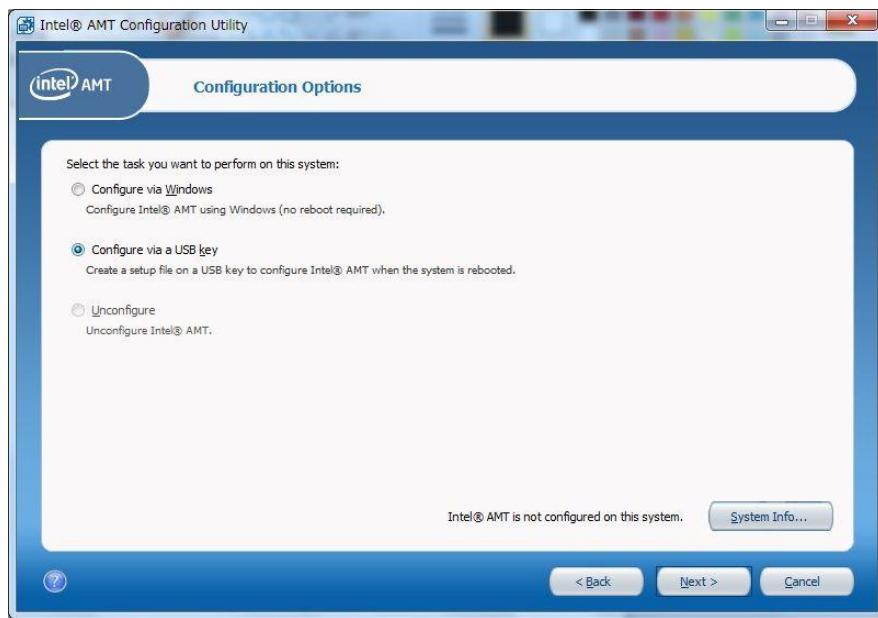


#### ※ 注意 2

下記の画面のようなメッセージが表示されたら、お使いのマシンに Intel AMT のドライバがインストールされていません。そのため、SCS を用いてのプロビジョニングを行えません。vPro 搭載のマシンかどうかを確かめたのち、使用している PC のメーカーに問い合わせ、ドライバをインストールしてください。



- 3) 「Configuration Options」画面が開かれますので、「Configure via a USB key」を選択して、画面下部の「Next」ボタンを押してください。



#### ※ 備考

画面右下の「System Info...」をクリックすると、以下のような画面が表示され、現在お使いのマシンの Intel AMT の構成状態/バージョン情報/UUID/リモートコントロールのサポート状態が確認できます。

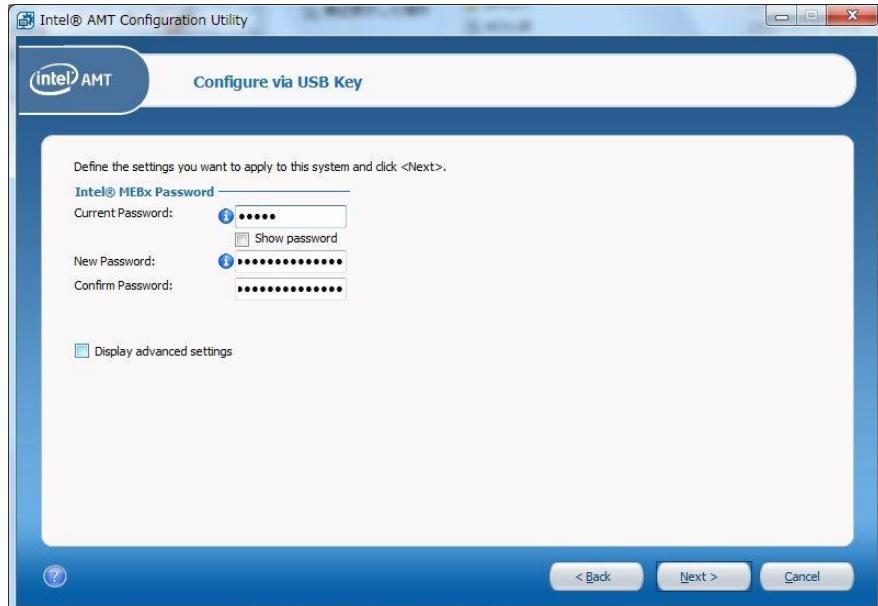


4) 「Configuration via USB key」画面が開かれたら、「New password(mandatory)」に Intel AMT に設定するパスワードを入力してください。この時、入力するパスワードには以下の制約があります。

- ・ 8~32 文字以内であること
- ・ 半角英字(大文字小文字)、半角数字、記号が全て使用されていること

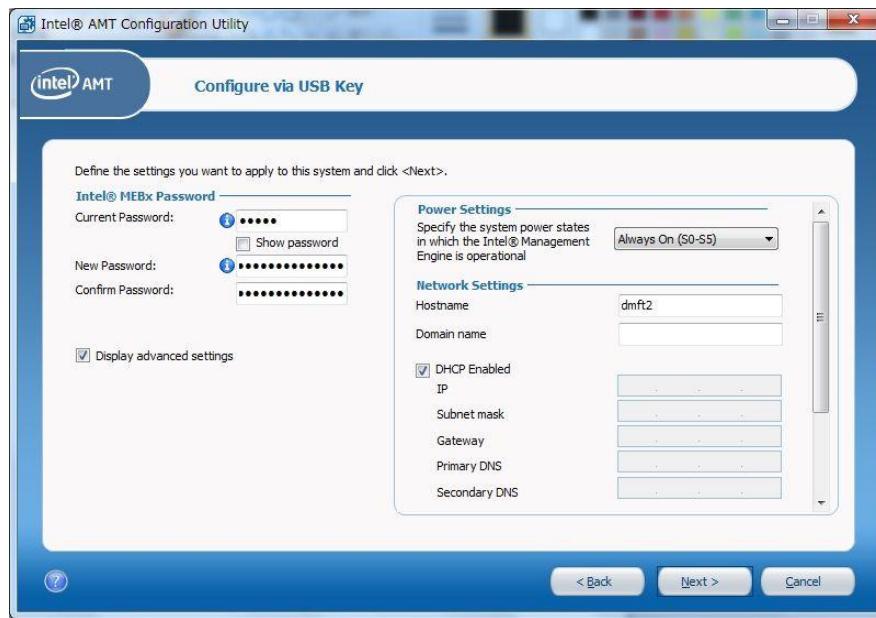
例)P@\$\$Word1234

入力したパスワードは「Confirm password」で再度入力してください。



#### ※ 備考

ネットワークの設定を行いたい場合は「Display advanced settings」をチェックすると、ネットワークの設定が行えるようになります。

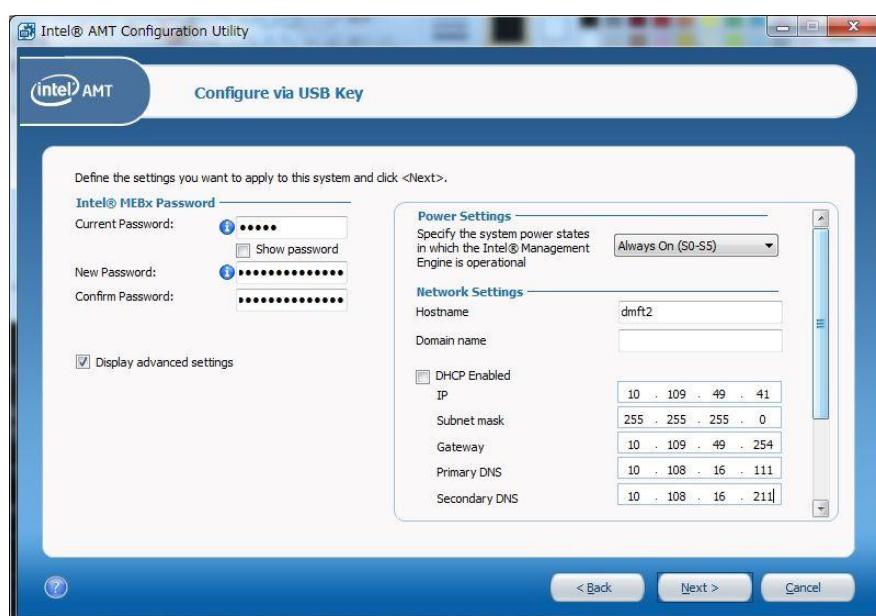


5) 「Power Settings」では、Intel AMT による制御を行う電源状態を設定します。

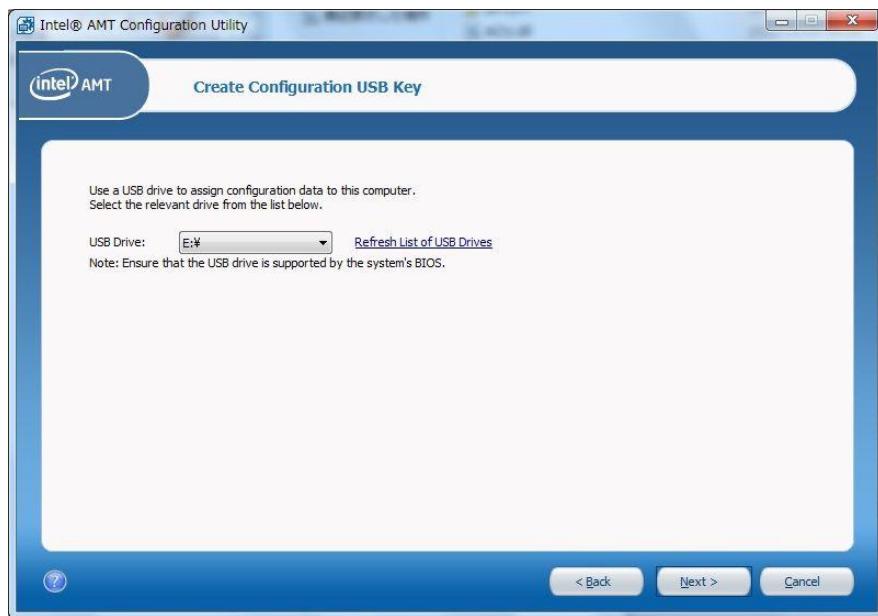
Always On(S0-S5) … システムが電源に接続されている状態であれば、Intel AMT による制御が可能です。  
こちらを選択してください。

Host is On(S0) … システムが動作している状態であれば、Intel AMT による制御が可能です。

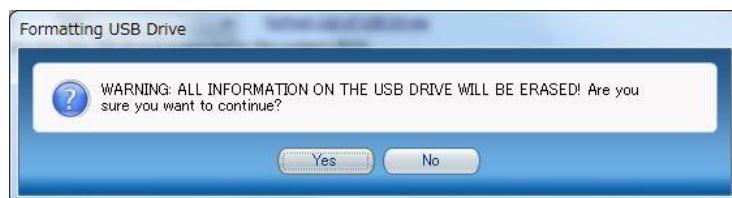
6) 「Network Settings」では Hostname/Domain name の設定を行うことができます。デフォルトの設定では、DHCP によって自動的に IP アドレスを割り振る設定になっています。設定された IP アドレスを確認するためには、構成完了後に Web UI(<http://localhost:16992/>)にアクセスするなどしなければなりません。  
手動で IP/Subnet mask/Gateway/Primary DNS/Secondary DNS を設定する場合は、「DHCP Enabled」のチェックを外し、各項目に値を設定してください。値を入力したら画面下部の「Next」ボタンを押してください。



7) 「Create Configuration USB Key」画面が開かれたら、Key ファイルを格納するUSB Driveを選択し、「Next」ボタンを押してください。

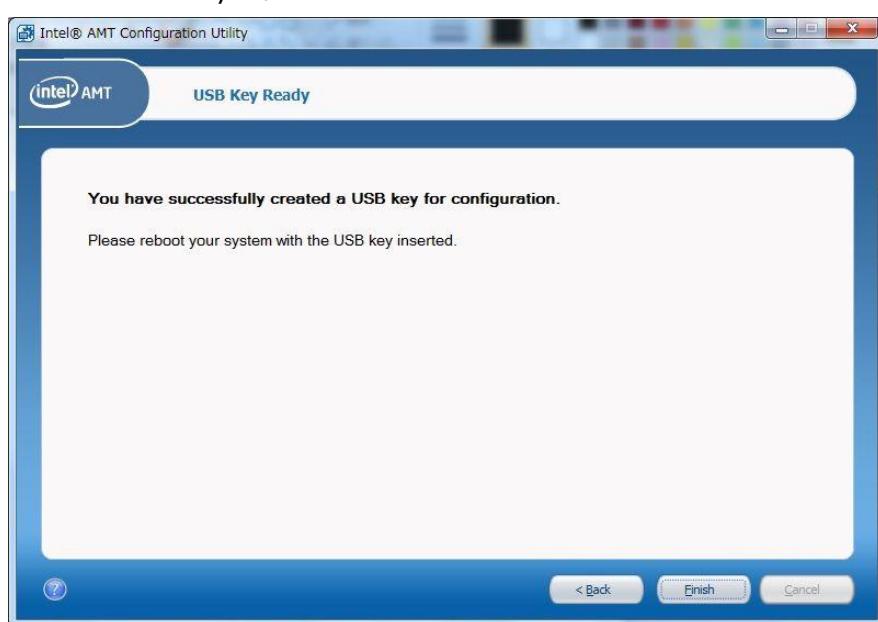


8) 「Next」ボタンを押すと、以下の画面が表示されます。USB Drive に格納している情報は全て削除されるので注意してください。



処理を続けるには、「Yes」ボタンを押してください。

9) 「USB Key」の作成が完了すると、「USB Key Ready」画面が表示されます。  
「Finish」ボタンを押して USB Key の作成を完了してください。



10) 作成した「USB Key」のみをシステムに接続し、システムを再起動してください。USB Key から起動させる必要がありますので、BIOS の設定で、USB ドライブの起動対象優先順位を一番高くしておいてください。再起動時に以下のメッセージがスクリーンに表示されます。

Found USB Key for provisioning  
Continue with Auto Provisioning (Y/N)

“Y”キーを押し、その後“Enter”キーを押してください。AMT の設定が行われ、次のメッセージがスクリーンに表示されます。

Configuration settings for the USB file were successfully applied  
Press any key to continue with system boot...

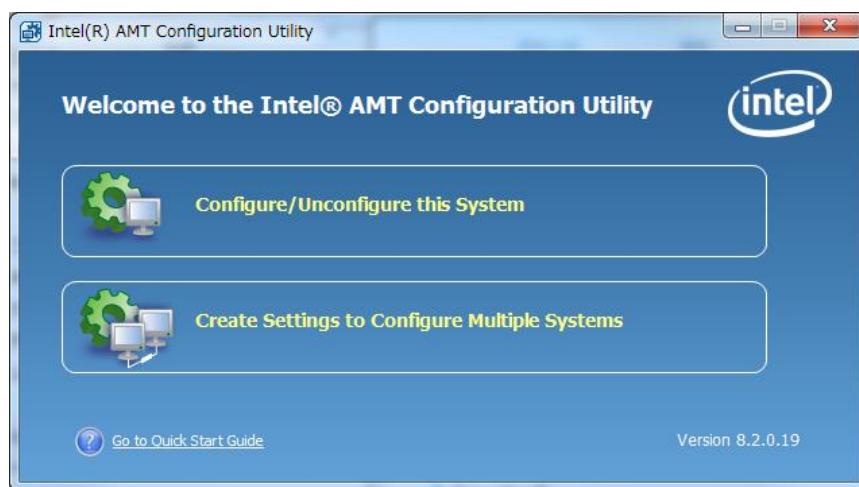
USB Key をシステムから取り除き、何かキーを押してください。システムは再起動します。

以上で、USB Key を使用したプロビジョニングは完了です。

### ● Windows 上でプロビジョニングを行う方法(初回)

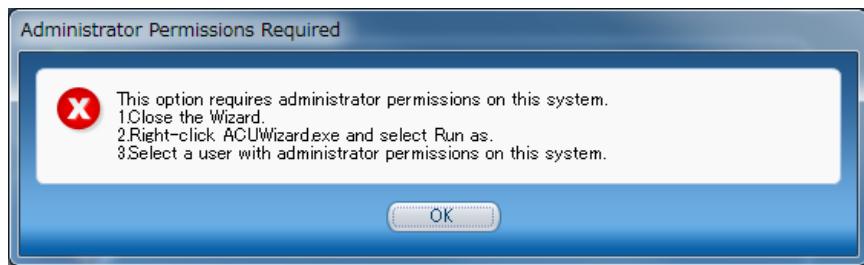
Intel AMT SCS は 7.0 以降から Windows 上でのプロビジョニングのサポートが開始されました。ここでは Windows 上でのプロビジョニング手順について説明します。

- 1) 展開したフォルダ配下の Intel AMT SCS フォルダ内の ACU\_Wizard に移動してください。フォルダ内 “ACUWizard.exe”を右クリックし、管理者で実行を選択し実行してください。この時、変更を許可するかどうかを聞かれますが、「はい」を選択してください。
- 2) 「Intel AMT Configuration Utility」ダイアログが表示されたら、「Configure/Unconfigure this System」(現在のシステムを対象とした構成)をクリックしてください。



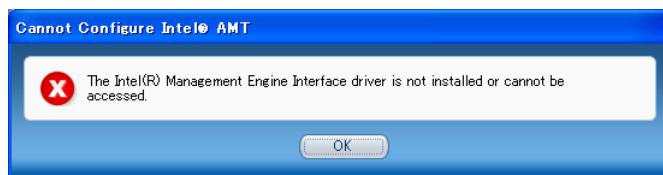
#### ※ 注意 1

2)で、管理者として実行していない場合は以下の図のようなメッセージが表示されます。「OK」を押して現在表示されているダイアログを閉じて、“ACUWizard.exe”を管理者で実行し直してください。

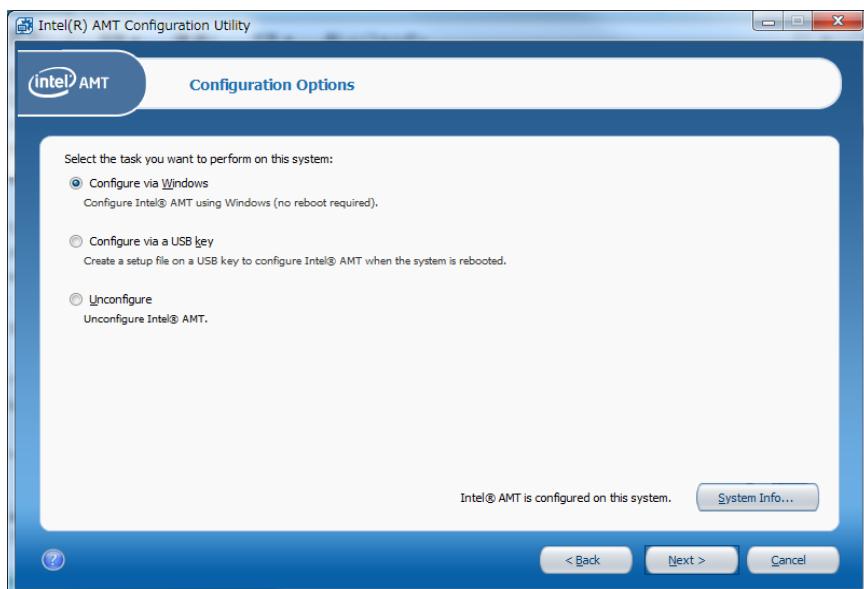


#### ※ 注意 2

下記の画面のようなメッセージが表示されたら、お使いのマシンに Intel AMT のドライバがインストールされていません。そのため、SCS を用いてのプロビジョニングを行えません。vPro 搭載のマシンかを確かめたのち、使用している PC のメーカーに問い合わせ、ドライバをインストールしてください。

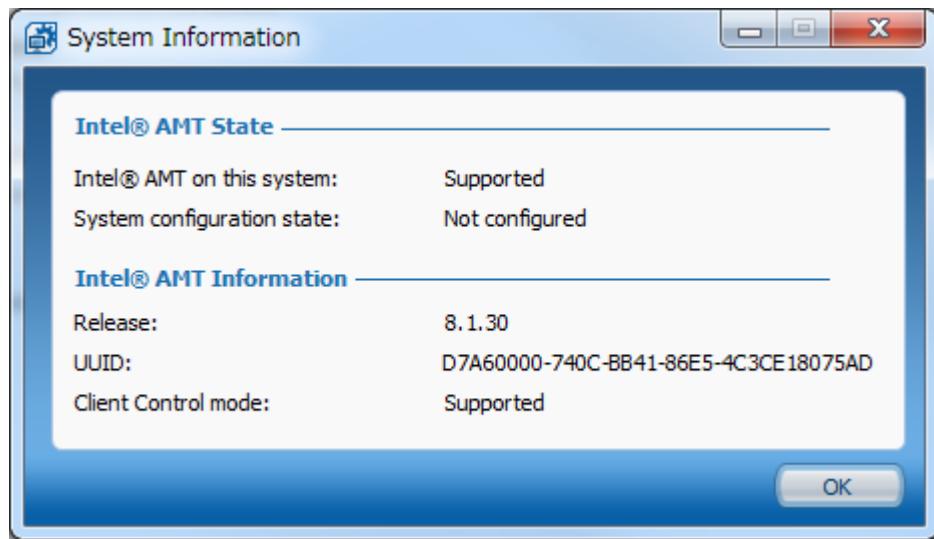


3) 「Configuration Options」画面が開かれます。「Configure via Windows」(Windows での構成)を選択し、画面下部の「Next」ボタンを押してください。



#### ※ 備考

画面右下の「System Info...」をクリックすると、以下のような画面が表示され、現在お使いのマシンの Intel AMT の構成状態/バージョン情報/UUID/リモートコントロールのサポート状態が確認できます。

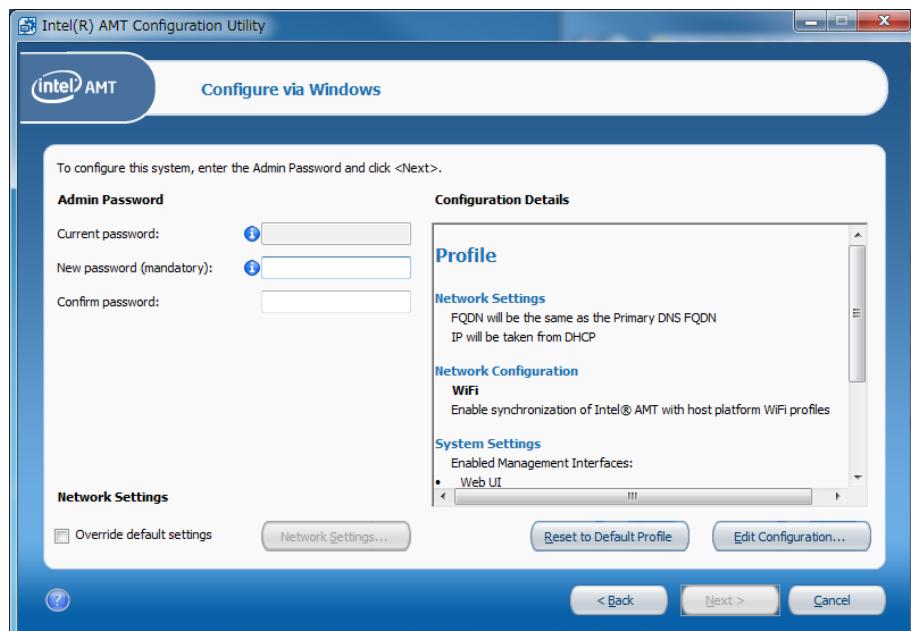


4) 「Configuration via Windows」画面が開かれたら、「New password(mandatory)」に Intel AMT に設定するパスワードを入力してください。この時、入力するパスワードには、以下の制約があります。

- ・ 8~32 文字以内であること
- ・ 半角英字(大文字小文字)、半角数字、記号が全て使用されていること

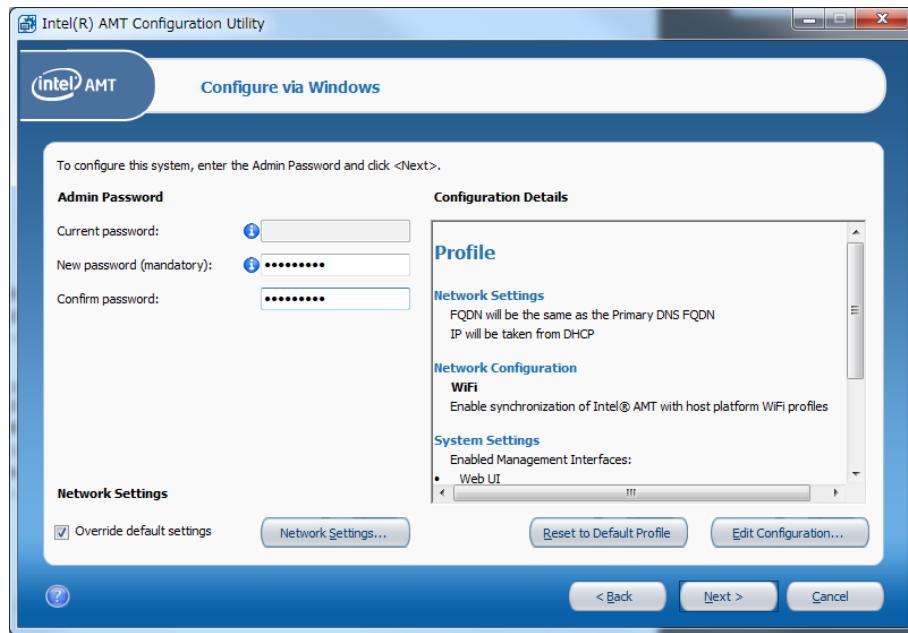
例)P@\$\$Word1234

入力したパスワードは「Confirm password」で再度入力してください。



#### ※ 備考

ネットワークの設定を行いたい場合は画面左下の「Override default setting」にチェックをすると「Network Setting」がアクティブになり、ネットワークの設定が行えるようになります。

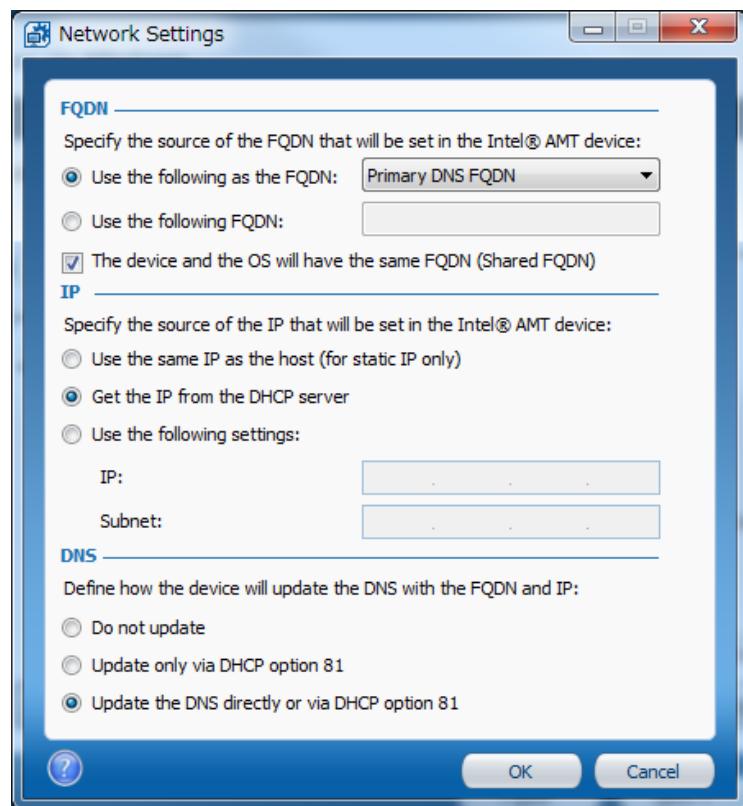


5) 「Network Settings」画面では FQDN(完全修飾ドメイン名)/IP アドレス/DNS の 3 つの項目について設定を行うことができます。初期設定では以下の画面のような設定となっています。基本設定のままでは、DHCP から自動的に IP アドレスが割り振られ、設定された IP アドレスを確認するためには、構成完了後に Web UI (<http://localhost:16992/>)にアクセスするなどしなければなりません。

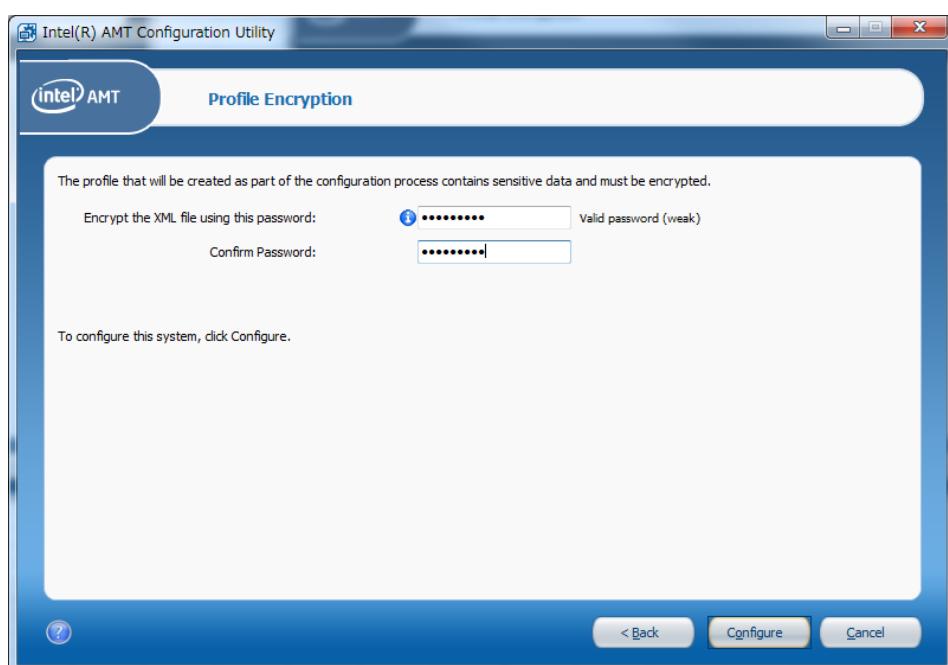
IP アドレスを自由に設定することもできますが、使用しているマシンの IP アドレスの設定をそのまま AMT の IP アドレスとして設定することもできます。IP アドレスを自由に設定したい場合は「Use the following settings」を選択し、IP アドレスとサブネットマスクを入力してください。使用中のマシンの設定をそのまま反映させたい場合は「Use the same IP as the host(from static IP only)」を選択してください。

#### ※ 注意

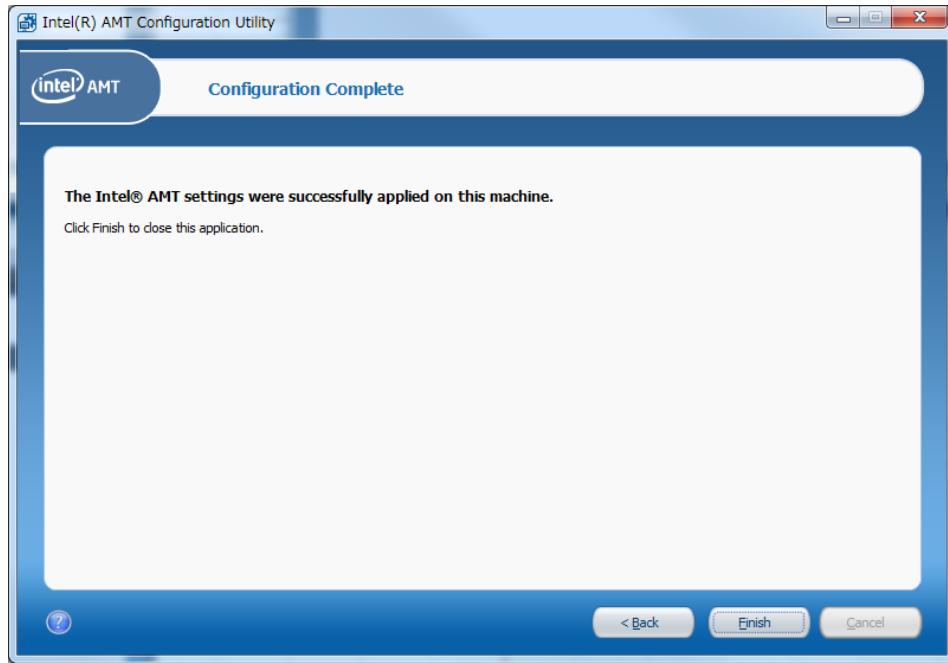
「Use the same IP as the host(from static IP only)」を選択するとき、IPv4/IPv6 のどちらも固定 IP を設定している必要があります。どちらか一方のみに固定 IP を設定している状態では、構成時にエラーとなります。エラー回避の方法として、固定 IP を設定していないものを「無効」にしてください。



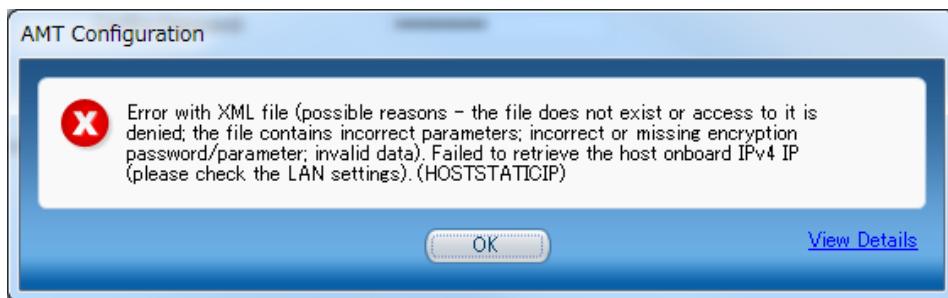
- 6) 「Configuration via Windows」画面での設定が終わったら「Next」を押して、次の「Profile Encryption」(プロファイル暗号化)画面へと移動してください。この画面では構成情報を保存する XML ファイルの暗号化に使用するパスワードを設定してください。パスワードの制約は前述の Intel AMT に設定するパスワードのものと同じです。



7) 入力項目を全て埋めたら、画面右下の「Configure」がアクティブになるので、押してください。そうするとプロビジョニングが始まります。下図のような画面が表示されれば、正常にプロビジョニングが完了しています。「Finish」を押し、画面を終了してください。

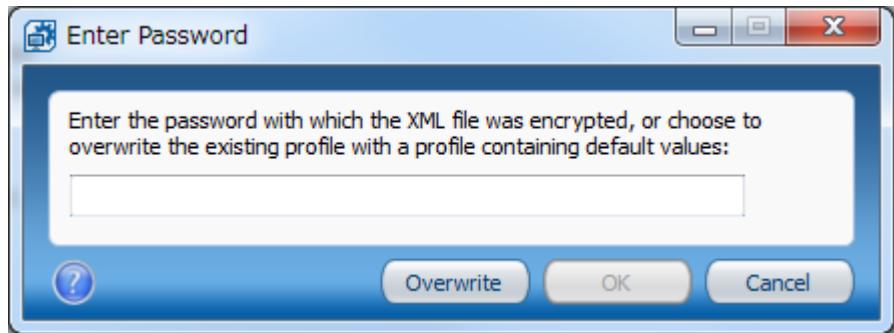


構成中に下図のようなエラーメッセージが表示された場合には、PC の IP アドレスの設定を見直してから、構成を再度行ってください。



### ● Windows 上でプロビジョニングを行う方法(二回目以降)

- 1) "ACU\_Wizard.exe"を右クリックし、「管理者として実行」をクリックしてください。「Intel AMT Configuration Utility」ダイアログが表示されますので、「Configure/Unconfigure this System」(現在のシステムを対象とした構成)をクリックしてください。
- 2) 「Configure via Windows」を選択し、「Next」をクリックしてください。  
以下のようないいじりを行います。前回の構成設定を引き継いだ構成を行う場合には、前回の構成時に XML の暗号化のために設定したパスワードを入力してください。前回の設定を引き継がず、最初から構成設定を行う場合は、「Overwrite」(上書き)を選択してください。



## 7. ライセンス

本ソフトウェアは日本電気株式会社が開発した製品です。本ソフトウェアの使用に当たっては、本製品に添付されておりま  
す、「ソフトウェアのご使用条件」に準拠いただきますようお願いいたします。

本製品のパスワードの暗号化には RSA Data Security, Inc. の MD5 message-digest algorithm を使用して  
います。

Copyright (C) 1991-2, RSA Data Security, Inc. Created 1991. All rights reserved.

License to copy and use this software is granted provided that it is identified as the "RSA Data  
Security, Inc. MD5 Message-Digest Algorithm" in all material mentioning or referencing this  
software or this function.

License is also granted to make and use derivative works provided that such works are  
identified as "derived from the RSA Data Security, Inc. MD5 Message-Digest Algorithm" in all  
material mentioning or referencing the derived work.

RSA Data Security, Inc. makes no representations concerning either the merchantability of this  
software or the suitability of this software for any particular purpose. It is provided "as is"  
without express or implied warranty of any kind.

These notices must be retained in any copies of any part of this documentation and/or  
software.

本製品には、カリフォルニア大学およびそのコンピュータによって開発され、下記の使用条件とともに配付されている  
FreeBSD の一部が含まれています。

All of the documentation and software included in the 4.4BSD and 4.4BSD-Lite Releases is  
copyrighted by The Regents of the University of California.

Copyright 1979, 1980, 1983, 1986, 1988, 1989, 1991, 1992, 1993, 1994 The Regents of the  
University of California. All rights reserved.

Redistribution and use in source and binary forms, with or without modification, are permitted  
provided that the following conditions are met:

1. Redistributions of source code must retain the above copyright notice, this list of conditions  
and the following disclaimer.
2. Redistributions in binary form must reproduce the above copyright notice, this list of  
conditions and the following disclaimer in the documentation and/or other materials provided  
with the distribution.
3. All advertising materials mentioning features or use of this software must display the  
following acknowledgement: This product includes software developed by the University of

California, Berkeley and its contributors.

4. Neither the name of the University nor the names of its contributors may be used to endorse or promote products derived from this software without specific prior written permission.

THIS SOFTWARE IS PROVIDED BY THE REGENTS AND CONTRIBUTORS ``AS IS'' AND ANY EXPRESS OR IMPLIED WARRANTIES, INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, THE IMPLIED WARRANTIES OF MERCHANTABILITY AND FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE ARE DISCLAIMED. IN NO EVENT SHALL THE REGENTS OR CONTRIBUTORS BE LIABLE FOR ANY DIRECT, INDIRECT, INCIDENTAL, SPECIAL, EXEMPLARY, OR CONSEQUENTIAL DAMAGES (INCLUDING, BUT NOT LIMITED TO, PROCUREMENT OF SUBSTITUTE GOODS OR SERVICES; LOSS OF USE, DATA, OR PROFITS; OR BUSINESS INTERRUPTION) HOWEVER CAUSED AND ON ANY THEORY OF LIABILITY, WHETHER IN CONTRACT, STRICT LIABILITY, OR TORT (INCLUDING NEGLIGENCE OR OTHERWISE) ARISING IN ANY WAY OUT OF THE USE OF THIS SOFTWARE, EVEN IF ADVISED OF THE POSSIBILITY OF SUCH DAMAGE.

The Institute of Electrical and Electronics Engineers and the American National Standards Committee X3, on Information Processing Systems have given us permission to reprint portions of their documentation.

In the following statement, the phrase "this text" refers to portions of the system documentation.

Portions of this text are reprinted and reproduced in electronic form in the second BSD Networking Software Release, from IEEE Std 1003.1-1988, IEEE Standard Portable Operating System Interface for Computer Environments (POSIX), copyright C 1988 by the Institute of Electrical and Electronics Engineers, Inc. In the event of any discrepancy between these versions and the original IEEE Standard, the original IEEE Standard is the referee document.

In the following statement, the phrase "this material" refers to portions of the system documentation.

This material is reproduced with permission from American National Standards Committee X3, on Information Processing Systems. Computer and Business Equipment

Manufacturers Association (CBEMA), 311 First St., NW, Suite 500, Washington, DC 20001-2178. The developmental work of Programming Language C was completed by the X3J11 Technical Committee.

The views and conclusions contained in the software and documentation are those of the authors and should not be interpreted as representing official policies, either expressed or implied, of the Regents of the University of California.